

文學博士 三宅雄次郎君序
大僧正 本多 日生師著 (既製發賣)

法華經講義

和裝鉄入全八冊 正價金四圓 郵税金三十錢
洋裝背皮全二冊 臺灣韓二十錢

法華は天地法界の秘藏、世界群籍の帝王、亞細亞文明の中樞、佛教教觀の實歸にして、佛陀觀、宇宙觀、人身觀、教法觀、行法觀、その他教相教義の全般に亘りて之を調整し發揮せるもの、苟も佛教の眞意を知らんと欲せば必ず法華經に來るべき也
古今東西の法華經觀を網羅し、特に天台と日蓮との創見を發揮して更に新考案の下に佛教の積極的統一主義を闡明したる本書は實に佛教研究の上に現代及未來の光明たらん矣

發行所 東京市淺草區南松山町 統一團
大賣捌所 東京市京橋區傳南馬町 須原屋

文學士 小林一郎君序
日宗新報記者 小泉要智君著
米人ブキ、氏 畫並贊

聖日蓮之文學觀

大再 評好 版再
▲菊判美裝二百頁 ▲本年中割引金四十五錢
▲郵税金八錢
日蓮文學は鎌倉文學の花なり日蓮文學は人格の活躍也血と涙とを以て染め出されたる大文學也物質文學肉慾文學に飽ける人々は須らく此雄渾壯大なる心願文學に接して心田の枯涸を潤せ

大僧正本多日生師講過
國友文次郎筆受

法華經大觀

洋裝美本 菊版二百餘頁 本年中割引 金四拾五錢 郵税金八錢
○總論 第一章、佛教の實歸 第二章、佛教の二大傾向 ○各論 第一章、佛身觀(一) 第二章、佛身觀(二) 第三章、教法觀 第四章、行法觀 第五章、人身觀 ○第六、法界觀
發行所 東京市京橋區南傳馬町三ノ五 須原屋書店
取次所 東京市淺草區南松山町四十五 統一團

統一

第四百六十六號

| 性 格 | 身 延 の 月 | 目 次 |
|------|---------|--------|
| 木村義明 | 征川眞應 | 宗教と社會 |
| | 阪本日桓 | 宗門經營理想 |
| | 阪本日桓 | 秋葉顯正 |
| | 阪本日桓 | 非村恂也 |
| | | 讀誌餘感 |
| | | 經王道人 |
| | | はしりかき |
| | | 木 寸 |
| | | 報 報 |
| | | 教學財團叢報 |

去ぬる建長五年癸丑四月二十八日に安房の
 國長狹郡の内東條の郷今は郡なり天照太神
 の御くりや右大將家の立て始め給ひし日本
 第一のみくりや今は日本第一なり此郡の内
 清澄寺と申す寺の諸佛坊の持佛堂の南面に
 して午の時に此法門申しはじめて今に二十
 七年弘安二年巳卯なり佛は四十餘年天台大
 師は三十餘年傳教大師は二十餘年に出世の
 本懐を遂げ給ふ其中の大難申す計りなし先
 々に申すがごとし余は二十七年なり其間の
 大難は各かつしろしめせり(聖人御難抄)

八、行法 4、道義 一、總要

性 格

木村義明

性格とは何ぞ

人には性格と云ふものがある、人の性質が善とか悪
 とか剛情とか柔和とか決つて、一つの資格を造り上げ
 た場合には夫を性格と云ふのである。人はこの性格の
 善ひと悪ひとかに依つて其人の價値は決るのであるから
 人はこの性格を造るに就ては大に注意を拂はねばなら
 ぬ。尤も性格と云ふものは自然の間に出来るもので、
 日々の心懸が積り積つて性格となるのである、而し又性
 格は變化することが出来る。

「人の御心は定めなきものなればうつる心さだめな
 し」元來人の性質は一定して居るものではない、又性
 質は變化するものである、如何云ふ風に一定して居ら
 ず、又た如何様に變化するかと云へば。

佛教では十界互具と云ふことを教へる、十界互具と

| | | | | | | | | | | | | |
|----------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------|------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------|----------------------------------------|---------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------|---------------------------------------------------|---------------------------------------------------|
| 一、發心篇 4 3 2 1 總 實 神 秘 的 發 心 要 的 發 心 推 理 的 發 心 7 6 5 4 3 2 1 | 二、教相篇 4 3 2 1 總 對 實 對 對 判 對 對 對 | 三、佛陀篇 4 3 2 1 總 對 實 對 對 判 對 對 對 | 四、教法篇 5 4 3 2 1 總 觀 持 念 的 信 仰 要 約 本 佛 佛 佛 佛 佛 論 論 論 論 論 論 | 五、人身篇 4 3 2 1 結 事 理 通 歸 具 具 具 具 具 具 具 具 具 具 | 六、法界篇 4 3 2 1 結 本 述 通 歸 門 門 門 門 門 門 門 門 門 門 | 七、本尊篇 4 3 2 1 結 佛 諸 總 歸 法 法 法 法 歸 法 法 法 法 法 法 | 八、行法篇 4 3 2 1 道 安 信 總 義 心 仰 要 | 九、得益篇 5 4 3 2 1 絕 對 的 益 要 二 一 對 對 對 對 二 一 對 對 對 對 | 十、批判篇 1 2 3 4 5 龍 樹 天 親 無 著 龍 樹 天 親 無 著 龍 樹 天 親 無 著 龍 樹 天 親 無 著 龍 樹 天 親 無 著 | 十一、警策篇 1 2 3 4 5 警 策 宗 宗 宗 宗 宗 宗 宗 宗 宗 宗 | 十二、訓育篇 1 2 3 4 5 訓 育 外 外 外 外 外 外 外 外 外 外 | 十三、祖傳篇 1 2 3 4 5 祖 傳 外 外 外 外 外 外 外 外 外 外 |
|----------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------|------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------|----------------------------------------|---------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------|---------------------------------------------------|---------------------------------------------------|

は、人には地獄の鬼の如き性質も、畜生の犬猫の如き
 性質も、餓鬼饕餮の性質も、天上界の樂天榮譽の性質も
 自分さへ善良にして救はるれば、人の事は善でも悪で
 も一向構はぬと云ふ二乘根性の性質も、又た自分は如
 何なる辛酸を嘗めやうとも、此の衰れなる人々には非
 安樂を與へたいと云ふ菩薩界の性質も、又た慈悲も智
 恵も共に完全圓滿なる佛界の性質も、悉く人間の心の
 内には備へて居ると云のが十界互に具ると云ふのであ
 る。更に平つたく云へば、人には善惡十種の性質も備
 へて居る、故に人は時と場合に依ては、善惡、邪正、賢
 愚、種々の心が起る、我々は或時は慈悲深く、或時は
 邪見甚しく、鬼の如く、或時は賢く、或時は愚
 痴朦朧にして豚の如く、花鳥風月を見ては美的快感し
 起し、寒熱饑渴に遭ふては苦痛を感ずる、之は人の性
 質は一定して居ないと云ふ何よりの證據である。
 斯の如く人の性質は一定して居ない、之は性質と云
 ふよりも寧ろ人の心的作用と云ふ方穩當であらふ。此
 の心的作用が十種の内何れが最も多く用ひられ敷々す

る時は習慣となり、習慣が固定して此に性質となるのである、されば習慣は性質を造り、性質は人格を造る孔子は「習ひ性と成ると云はれ、諺にも「習慣は第二の天性なり」と云ふてある。要するに人は習慣則ち平素の心懸に依りて、人の性質は如何にても成るものと思はなければならぬ。然るに人は生活して行くに就ては、善か悪か何とか習慣なしには生活して行くことは出来ない、則ち人間には習慣なしにはやれない、如何しても免れ難き習慣ならば、成るべく善良なものを撰ばなければならぬ。

性格は習慣に依りて出来上り、又た習慣に依りて變化することは以上の話で解た。然るに變化して行くに二種の傾向がある、向下的變化則ち墮落する方と、向上的變化則ち進歩する方とである。

性格の變化

前に述べた如く、人の心は善惡兩方に作用し、従て其心懸の重き方に傾向が就て、習慣となり、性格となるのであるが、向下的變化則ち墮落は、惡の傾向

を持た方である、我々が日常の心の作用、身の行為に就て、瞋怒、貪欲、嫉妬、詐欺、争闘、傲慢、邪見、愚痴、さては惡口陷擠、姪姪、斯の如きあらゆる罪惡は皆な向下的變化で、既に地獄の底に墮落して居るものである。斯る心斯る行為の習慣は、やがて罪惡の性格と成り、人相までが罪惡となり、如何にしても救ふことが出来なくなる、人の不幸は罪惡の性格、墮落の習慣を造た程甚しきはない、人として恐るべきは惡の習慣、罪の性格である。此の罪惡墮落も性格と決らざる内は、變化は爲し易いのである、單に習慣丈ならば、教育制裁若くは宗教の力に依り、其人の心懸の如何に依りては、善良の習慣に變化することが出来るのである、然れども性格と決りてしまつては變化は仕惡いのである、如何しても一遍は地獄へ墮ちて、罪惡の結果たる苦痛を受けねばならぬ。

向下的變化則ち進歩は、心の作用と身の行為に就て、總て善良の方針を取るのである、我々の日常の心懸けをして、慈悲に傾け、柔和に傾け、忍耐に傾け、

謙遜に傾け、義務の精神、博愛の精神、勉勵の精神、犠牲の精神、公共の精神、優美の精神、凡ての善良文明を意味したる徳を以て、我々の心と行為とに習慣を造る場合は、則ち向下的變化である、進歩の性格である。而して吾人は如何なる處まで進歩すべきか、世界人生上の文明を進めて行くは勿論の事、常住不變、快樂無窮、自由自在、清淨潔白の佛界に迄歩まなければならない。我々には幾分の慈悲柔和等の心懸はある、然れども習慣の力が鈍ひので、全く善良優美なる性格を造り擧ることが出来ないのである。

習慣の力

墮落するにも進歩するにも皆な習慣の力に依るので習慣に就ては我々は最も注意をせねばならぬ、習慣の力は恐ろしいものである、流車の様な電車の様な非常なる力を以て進むものは、又た非常なる隋力を有するもので、機關を止めても車は止まらぬ、一丁位は走居る、故に停車場に車を止め様とするには、一丁も二丁も手前より機關を止め隋力を抑へて、漸く豫定の所

へ停るのである、人間の心の作用身の行為も、習慣の隋力は急に止め様としても止るものでない、漸次に注意して習慣の力を外へ轉せしめなければならぬ。例へば、朝寝坊が如何に心ばかり入れ更へても、習慣の隋力があるから、急ぐに翌朝から早起さす譯には行かぬ、漸次に直さなければ身体が調子がくるうことになる。怠け者が急に勉強し様としてもろふは行かぬ、直に飽きてしまふ。金持が急に貧乏して一文なしになれば、其の苦痛に堪へ難く、遂には自殺する様なものである。而しいつも貧乏なものは一文なしても平氣である。又極の貧困者が、急に富貴の身分に成たからとて品位、性格は富貴には成らない、世に「成り上り者」と蔑げすまれるのは其爲めである。要するに習慣の力は漸次に加へて、其力に堪へる様にして行かねばならぬ我々人間には、多くの罪惡の習慣があるから、漸次に善良なる方へ力を轉せしめ、進歩的に變化して行かねばなるまい、又た此の漸次に轉せしめると云ふことが誠に容易い方法で、何の苦もなくいつしか變て行くの

である、而して善良な習慣に漸次隋力を加へて行く、遂には知らずの間に、我々は全く善良なる習慣の力を養ひ、立派なる性格を造り上げるのである、斯の如く習慣は非なる隋力を有するものであるから、之を善用すれば立派なる結果を見るし、悪用すれば隋落の淵に沈むのである、故に習慣と云ふことに就ては我々は日常の心懸に餘程能く注意せねばならぬ。鐵は鍛へば堅くなるし、手足も使へば達者になる。特に手の如きは最も解り易い例である、毎日字を書て居れば字が上手にしかも達者に成る、針を持って居れば裁縫が達者になる。我々は善良なる習慣の力を達者にしなければならぬ、而して大にして美なる性格を造らねばならぬ。

佛の性格

我々が善良なる習慣、大にして美なる性格を造るには、何を標準として進んだらよからふか、如何なるに基き、如何なる者に見習ふたらよからふか、此が最も能く注意をし且つ研究しなければならぬ所である。

汝、舍利弗、尙此の經に於て、信を以て入ることを得たり。
是人、大信力及び志願力、諸善根力あらば當に知るべし、是人は如來と共に宿するなり、如來の手を以て、其頭を摩て給ふを得ん。

華嚴經等の諸經には。

信は道の元と爲す、功德の母なり。
一切の行は信を以て首と爲す、衆徳の根本なり。
一切の諸の功德は信を以て使命と爲す、諸の寶の中

には信の財を最第一と爲す。

大信心は即ち是れ佛性なり。

菩提心は則ち一切諸佛の種子なり。

信は是れ佛の子なり、是の故に智者は應に常に信に親しむべし

信心を種子と爲し、善行を時雨と爲す。

斯の如くに、佛は我々に信心を勧むるのに、語の限り盡してある、信仰は我々の手である、佛の慈悲は救

夫は世の中には、聖人、賢人、學者も澤山あり、教も又た種々ある、然しながら拙者をして之を撰ばしむれば、宗教の教に従ふを最も穩健であると思ふ、宗教の中に法華經の教が最も完全圓滿であると思ふ、人格では佛の性格を標準にして、夫を目的として自分の性格を進めたら善からうと思ふ、佛の性格が最も完全圓滿であるからである。然らば、

如何にして佛の性格に近くべきか

である、處が、此には大体二つの方法がある、第一が信仰で、第二が世間の道徳である。

信仰は宗教の生命で、萬善の基ひである、信仰は人道の油である、信仰は人間唯一の寶である、信仰は人生唯一の安息所である、信仰を持って居る人程幸福な人はない。其内にも、本佛釋迦牟尼世尊を頼りて、法華經の教を受けるものは最も幸福なるものである。法華經に信仰の事を説て。

汝、今信力を出して、忍善の中に住せよ。

汝等、當に共に一心に、精進の鏡を被て、堅固の意

ひの繩である、手にて繩を捕へなければ、如何にしても救はれることは出来ない。我々は佛の性格を信じ頼るに依て、憧憬るに依て、佛の性格に接せられ、顯本せられ、同化せられ、感染せられ、而して佛の性格に近くのである。

第二に、道徳の實行である。我々の行ふべき道徳は種類を云へば澤山あるが、第一が報恩、之は饒義務の觀念をも含む、第二は慈悲である、之は博愛の思想を含む、この二つは主なる道徳で、其他は忍耐、勤勉、節操、慚愧、廉直、平和、公益、社交等、之等は自己及び他人若くは社會一般に對する徳義で、皆な是非實行を必要とする、特に我國に於ては、忠孝を以て倫理の大本としてあるから、誰人も忘れてはならない。

扱て此等の道徳は、昔より決て居て、誰人も知て居る、然しながら誰れも完全に行へないのが不思議だ、知て居て行へないとは如何なる理由であらふ、此は我々の心に、道徳を實行する習慣上の力がないのである、若し習慣の力がもとよりあるならば、知りきつて居る

ことは行ひ易ひ譯であるが、事實の上にて、人間は左様に成てゐない。學者が如何に理屈を並べても、道徳家が如何に教へても、社會が如何に制裁を加へても、國家が如何に法律を設けても、我々に道徳の完全なる實行は仲々困難である、よし出来ても其實行は非常に苦みつゝ行ふのである、愉快に安樂に實行は出来ないのである。故に社會の制裁が弛みと、直に實行は止め、勝手なことをして居る、人の見て居ない所では随分惡ひことをする、盜竊もやる、摘食もする、旅の耻はかき捨てだ」と云ふ洒落もやる、人は施すよりも先づ貰ふことを考へる、自分の罪を棚へ擧げて先づ他人の非を數へる、人間位勝手なものはない、自分の御都合ならば、如何なこともする、人間位制裁力の鈍いものはない。畢竟之れは道徳的習慣の力が鈍いからである、此力を強くするには、普通の理屈や制裁のみでは成功しない、如何しても宗教信仰の力を加へて來なければならぬ、佛の力を添へて貰ひたいのである。我々が佛の慈悲を信じ救済を信ずる故に、佛の教を

受ることに成る、佛の教は懇切丁寧で、而かも道理に契て居るから、能く守りたくなる、能く守る故に實行は自然に之に伴ふ、信仰に依て未來の安心が出来る、未來の安心が出来るからして、現在に於て心に歡喜が出て來る、歡喜の心は勇みの心を生む、勇みの心は強健の心になり、平和の心に成る、人の心が斯様に成れば、自分の事にしても他人の事に對しても、又は社會の事に對しても、正しき判断が出来、從て争ふ心が無い、故に平和に事を解決することが出来る。又た佛を信じ佛を渴仰する故に、佛の事を凡て似爲やうとする佛の特性たる慈悲の心懸けにしても、安樂の心懸けにしても、人を救ふと云ふ心懸けにしても、一度似爲、二度まね、三度、四度、五度、十度となるに従て、習慣と成り、其習慣が重なる時は、遂には性格と成る、經文に「功を積み徳を累ぬる」と説てあるは、斯ることであると思ふ。又た「釋尊の因行果徳の二法は、威く妙法蓮華經の五字に具足す、我等此五字を受持すれば、自然に彼因果の功徳を譲り與へ給ふ」との、宗祖の御語

は、法華信者の我々の道徳の力を證明したものである。生死に出入すとも怖畏の想なく、諸の衆生に於て憐愍の心を生じ、一切の法に於て勇健なること、壯なる力士の如し。

信仰あるものは、憶病が勇氣に變化し、殘忍の性質は慈悲深き心に變るのである。
世間の法に染まざること、蓮華の水に在るが如し。
信仰あるものは、清廉潔白にして蓮華の様である。
即ち之を服するに、病盡く除き愈へぬ。
信仰あるものは、心の罪惡を盡く除くことが出来る。
釋迦佛の御魂の入りかはれる人は、此の經を信ずと見へて候へば、水に月の影の入れば水の清きが如く、御心の水に、教主釋尊の月の影の入給ふか。
信仰あるものゝ心には、佛の性格を宿すことが出来る。
苦をば苦とさとり、樂をば樂とひらき、苦樂ともに思合せて、南無妙法蓮華經とうち唱へ居させ給へ。
信仰あるものには、苦樂畢竟何者ぞである。
立わたる、身のうき雲も、晴れぬべし、たゑぬみの

りの、鷲の山風。
信仰あるものは、光風霽月、胸中自ら練々として餘裕がある。
信仰は萬善の基功徳の母である、信仰は本で、道徳は花である、佛の性格は稟質である。信仰は油である、之に依て、凡ての道徳は容易く運轉することが出来る。信仰は車である、之に乗れば、足一歩も行かずして目的地に達することが出来る。龍女は、信仰に依て「慈悲仁讓志意和雅」となり。諸の菩薩は、信仰に依て、布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の修行を積み、不輕菩薩は、信仰に依て、杖木瓦石の迫害を忍び。天親菩薩は、信仰に依て千部の大論師となり。日蓮上人は、信仰に依て日本國を靈化せんと欲す。我々に信仰あらば、我々の性格は如何に變化するとも、決して向下し、墮落はしまし、漸次に向上し漸次に進歩するであらふ。我々は信仰し、安心し、且つ努力して佛の性格に近かなければならない。信仰の不退、道徳の完備、佛格の體現、成佛が、即ち我々の目的で

ある。經に云、
是人佛道に於て、決定して疑あることなけん
南無妙法蓮華經 (をばり)

十三、祖傳

身延の月

笹川真應

たちわたる身の淨雲は、限なく晴れて、今はその名も目出度身延の山に「常説法教化」の法輪を、轉じ給ふ日蓮大聖人、すぎにし建長五年四月二十八日、洋々たる大海、碧波幾千里、雄大喻へがたなき太平洋頭は安房國清澄の山頂に於て、旭光海面に浮び出るの時、人生救済の福音たる、本佛所證の本住法たる、妙法蓮華經を唱へて、嚴かに立宗の儀式を擧げられた、この梵音は海潮の音に和し、日蓮聖人の意氣既に宇宙を呑むの概あり、四圍の景形容すべき筆の、力なきを吾人は恨とするのである、
正法傳道と謗法禁斷は、人生救済の要義にして、日

正法傳道と謗法禁斷は、人生救済の要義にして、日

凌ぎ、遂に成功せられたり、聖人また常不輕菩薩の故事に従ひ、本佛自證の要法を傳へて、二十餘年の間或は所を逐はれ、或は庵室を焼かれ、或は流罪に處せられ、或は白刃頭を傷け、或は弟子を殺され、有餘侮辱と迫害を受たるも、正義の力は能く諸の障魔を、屈伏せしめ聖人の主義は、永久に世道人心を益することに成りし、日本國を左右する時の執政北條氏は、百萬の軍兵を、自由に驅使するも、正義の力に對しては、施すの術なく、聖人の前に降伏したり、北條時宗が聖人に贈れる牒狀に

「三國に比類なき妙宗、後代ありがたき尊僧」と
また以て聖人の確信と、邪は正に敵しがたき事を知るに足る、

文永十一年五月、聖人は青天白日の身となり、佐渡の孤嶋より鎌倉に還り給へり、北條氏昭すに高祿を以てし、聖人を誘惑せんとす、聖人謂へらく、北條氏反省して尙悔むる能はず、我を誘惑せんとす、我は世間の法に染らず、蓮華の水にあるが如く、清き理想と固

蓮聖人は、この主義を天下に大聲疾呼せられたり、世の諺に、宰相たらずんば良醫となれと、これ仁術は人類が靈長の職分を發揮するの意を、示したるものにして、善良なる教法は世界最上の寶で幸福の源泉と謂べられ、善良なる教法を傳ふる法師は、これ又世界の寶にして、傳道の効果は、永久に残りその法師は、永久に生ける人となる、これ則ち佛陀のその如く、永久に生ける靈者となると、同じく、正法信仰の賜の偉大なることを、自覺すべきである、善良なる教法によりて、救済を現實ならしめんとしたるは、日蓮聖人の理想にして、峻嚴犯すべからざる、聖人の確信である、この確信を實行せんとせば、侮辱迫害間斷なく身邊に圍繞することも、聖人始めより、覺悟せられたり、法華經を拜見するに、自己の確信を遂るの難事なるべきを、仔細に説かれ、侮辱迫害に續き纏て、成功の彼岸に到ることを、訓誡せられてある、過去に於ける常不輕菩薩は、衆人に對しうの本分を自覺せしめんとして、但行禮拜の動作をせられたる爲に、侮辱迫害を

き確信を有し、二十餘年が間傳道のために、健闘し本佛の使命を全ふせんと努めたり、今にして日蓮を誘惑せんとする、北條氏の淺幕なる、三度諫て用られずんば、身を山林に退く古の賢人に習ひ、日蓮も身延に退隱すべしと、こは、表面の事にして、その實は舞臺面の變化で、從來採れる、勇往萬進猛烈的活動の傳道が靜寂的活動に轉化したるのみ、活動は依然として活動なり、救済の念一日も止みがたき、聖人のなごて、寸時の猶豫あるべき、

活動は時間より空間に亘れり、身延退隱は末法萬年救済の、大經綸を行ふためである、されば、身延に隱栖せられたるは、その實退隱にあらずして、大活動なり、また、一面には、身延隱栖は人生靈活を範を垂れ給たるのである、侮辱迫害の反動として、聖人に對し畏敬となり、依頼となり、渴仰となり、着々成功の域に進みたる、聖人の行動として、身延に靜寂的靈活せらるゝは、當然の方法と觀るべく、靈者、所作その旨洵に深く、小知を以て忖度るの愚なる、

身延の山靈、千古希有の聖人を迎へて、靈に靈を加へたり、聖人此の間の消息を洩らして、左の如く述べて給へり

「誠に身延山の栖は、千早振神も恵をたれ天下りましますらん、心なき賤の男賤の女までも心を留めぬべし、哀を催す秋の暮には、草の庵に露深く、檐にすだく蛛蜘蛛の糸玉を連ぎ、紅葉いづしかに色深ふして、絶絶に傳ふ懸樋の水に影を移せば、名にしれぬ龍田河の水もななくやと疑はれぬ、また後るには峨々たる深山聳へて、梢に一乗の果を結び、下枝に鳴く蝶の音滋く、前には滔々たる流水瀉へて、實相真如の月浮び無明深重の闇晴れて、法性の空に雲もなし、かゝる砌なれば、庵の内には晝は終日一乗妙典の御法を論談し、夜は竟夜要文誦持の聲のみす、傳へ聞く釋尊の住み給ひけん、鷲峰を我朝この砌に移し置きぬ、霧立ち嵐はげしき折々も山に入て、薪をこり、露深き草を分けて深谷に下りて

力限りなきことを、認められた、實に靈者の感化は萬古の下、偉大の勢力を保存しつゝあり、法の尊貴につれて、人また貴く、人の貴さにつれて、所また貴く境智靈感の妙を發揮することは、前に抄録たる御文章の通である、

身延靈活に就て、聖人が温容たる行住坐臥の振舞は不言の教訓を興へたるなかに、最も吾人をして、感動せしめたるは、人道の徳本を現實せられたることである、庵室より五十丁昇れば、東海の諸國眼下に見ゆるにつけて、湧き出るは、聖人が思親の誠意である、大舜は五十にして父母を慕へるを後賢者の大なるものとせり、聖人は六十にして尙且つ父母を慕給へり、九ヶ年の間この峰にのぼり、慈父悲母の面影を偲ばるゝをこよなき、樂みとせられた、

聖人九ヶ年の生活は、清淡にして質素なりき、池上右衛門宗仲は、身延山に登り、暫らく聖人の庵室に足をとめて、聖人の靈化をうけたり、家に還るの日その妻子に告げて云く、本化の靈者清素の生活をなし給へ

岸をつみ、山河の流も早き巖瀬に菜をすゝぎ、袂しほれて干しわぶる思は、昔しの人丸が詠じける、和歌浦に、もしほ垂れつゝ、世をわたる海士も、かくや思ひ遺らると」

それ、身延山は甲斐國波木井の郷にあり、巍々たる山岳連綿として、東には天子ヶ嶽南は鷹取の山西は七面の峰北は則ち身延山なり、これ等の山高く屏風を衝立たるが如く、水勢矢を射るが如き富士河北より南に流れ、早河白河身延河またその附近にあり、樹木森々として奇巖連々たり、この仙境を撰び庵室を構へたる日蓮聖人は、實に九ヶ年の間、此に靈活せられたのである、宗教興隆の機運にありては、何等の裝飾なきも精神美にうたれ、腐敗銷沈の時にありては、色彩美を街ふて、命脈を續がんとす、聖人の構へたる庵室は外観粗末なるも、七寶を以て莊嚴したるが如く、感化の

り、われ何んすれど、美酒飽食せんやと、即日改めて終生論らざりしと、聖人不言の教訓も、勢力また偉大の功を奏する末世の門弟、徒食安逸を貪る者の、慙愧すべきにあらざや、

詩々乎として、救済の教を布衍つゝある中に、蒙古の問題は彌々逼迫し、干戈當にあらんとす、蒙古の問題に對する、聖人の意見熱誠は、既に拾六年の以前に於て發表せられ、爾來一貫して光明を放てり、立正安國主義は、聖人の誠を國土に移し、佛國實現の理想に外ならず、蒙古の問題に就て、聖人を評論してその靈徳を毀なふその罪大なり、聖人が門弟等を戒飭られたる御文章は左に

「小蒙古の人大日本國に、寄せ来るの事、我門弟並に檀那等の中に、若し佗人に向ひ、將また自ら言語に及ぶべからず、若しこの旨に違背せば、門弟を離すべき等の由、存知する所なり、

弘安四年六月十六日 日蓮 謹重なる注意と、聖人が理義の上より、國家の存立に

對する判定が明瞭と了解せられ、小蒙古大日本これ國家存立上大日本國は王道の粹にして、小蒙古國は爭奪の結果に於て、存立せることを、判定せられたるのてある、

外敵に刺撃せらるゝにつけても、聖人を畏敬し渴仰するもの、續出し、正法信仰法禁斷の要義が、人生の必要條件なることを、認めらるゝ中に、聖人は庵室にありて、専心佛道怠りなく、觀念の床の上に夢を結ばば、妻戀鹿の音に目を醒し、我身の内に三歸即一、三觀一心の月、曇りなく澄けるを、無明深重の雲、引き覆ひつゝ、昔より今に至るまで、生死の苦界に輪る者の、多きを哀み給ひける

本佛は今や何處に實在せらるゝか、凡聖同居の淨土に在します、同居の淨土は何處にあるか、法華經受持の目前にあり、釋尊の住み給けん、峰を我朝この砌に移し置く」聖人の本意は、こゝにあり、身延の風景優美なるが故にあらず、

聖人、非滅現滅の雲に隠れてより、既に六百年の星

霜を過ぎ、身延の峻靈は替らざるも、今は痛く風教の氣品を損じたり、靈化なき俗受信仰を改めて、速に聖人の教制に基き、靈威の妙を發揮せよ、水濁れば月澄まず、枯れたる枝には鳥止まらず、聖人今や何處に在しますか、吾人は一日も早く、曇りなき教法の月が身延の峯に宿らんことを、祈るの外なきのみ。

附記

姉崎博士の「身延詣て」の内に末世の宗徒が、身延に對し偏見を懷くよしを、日宗僧侶が口にしたることを書きつらねあり、この編を一讀せられたらんに、この愚痴は雲となり煙となり了らんか

日什上人置文諷誦章講義

八十三老比丘 阪本 日桓 講演

第廿八回

次題目、者界如三千、之本名三身果滿、之内證本迹兩門、之肝心先師弘通之本經也、此の五句三千三字は本宗の行者の所修の題目を

歎釋したる文で有ます此の五句分つて三段初の一句四字は標の文で次に界如三千の下の三句廿一字は正しく本尊の行者所修の題目の法林を釋し三に先師の下的一句八字は所修の題目の能弘の導師を擧て結釋したる文で有ます○次題目、者偕て爰にまた次の一字を置きたる所以は上の所修の題目は諸佛出世の本懐の妙法なる事を釋し今は此の題目の本林を釋したるが故に次に諸佛出世の本懐たる妙法の法林は界如三千等と釋したるで有ます題目と申すは獨り法華經のみに限る者では有ません尺尊一代の聖教初め寂滅道場三七日所説の華嚴經より終り双林最後の一日一夜の所説の涅槃經に至るまで悉皆題目か有ます華嚴經の題目は大方廣佛華嚴經と云ふ涅槃經の題目は摩訶般若涅槃經と申す此の經の題目は妙法蓮華經と號す此の五字の題目に二種有ます一には開權顯實の題目二には開迹顯本の題目で今爰に次題目者と標した題目は開迹顯本の妙法を指して次題目者と擧たて有ます都て題目に七種の立題とて七種の題目の立て方の有る事は上に於て委しく辯して聽せた

通りて有ます○界如三千之本名文此の一句七字は所修の法に約して題目を歎釋したる文で有ます界とは十界の事て如と申す事て有ます三千とは十界に各々十界を具足するが故に百界となる此の百界に各々十如を具足すれば千如となる此の千如か五陰世間にも足具し衆生世間にも具足し國土世間にも具足して有るから其數が三千となる故に界如三千と釋したるで有ます此の界如三千の法門には理の界如三千と事の界如三千か有ます是れは上て委しく辯じた通りて有ます本名とは本林の名目と云ふ事にて此の五字の題目は法華經本門壽量品文底秘沈の事の界如三千の本林の名目が妙法蓮華經の五字の題目で有ると御講談になつたて有ます○三身果滿之内證文此の一句七字は能證の人に約して題目の功德を嘆釋した文で有ます此の三身果滿の内證の佛には法華經の中に二種有ます一には迹門の始覺近成の三身果滿の内證の佛は淨飯王の太子悉多が十九出家三成就の垂迹示現の佛にして譬は水中の月影の如く本無今有有名無實の佛にて傳教大師が有爲の報佛は夢裡

の權果と釋したるは此の三身果滿の佛の事て有ます二には本門の本覺久成の三身果滿の内證の佛是れは久遠五百塵點劫の往昔本因本果實修實證の本佛の釋尊にして覺は天月の如く無始本有の實躰ある佛にて傳教大師が無作三身は覺前の實佛と釋したるは此の三身果滿の内證の本佛の事て有ます此の本覺久成の三身果滿の内證の釋尊には本因本果實修實證の自行の大功德を備へ化他外用に於ては堅に高く三世九世世々萬々に亘り横に廣く十方法界に周徧し無量恒河沙の一切衆生を化度したる自門化佛兼備の大功德を具足し在す佛を此の諷誦章には三身果滿之内證と釋して單に自行の一方のみを擧て御書になりたる所以は宗祖大聖所依の開迹顯本の法華經の正意は第二番の成常已來今日に至る迄三世九世世々萬々の世に垂迹示現して大小權實本迹の諸經を説きて無量恒河沙の衆生を化度し利益を施與したる其功績は正しく本覺久成の三身果滿之内證の自行成滿の本佛の大功德に根據したるが故に開迹顯本したるて有ます依て單に三身果滿之内證の自行成滿の本佛に約

して御講談になつたて有ます○三身とは法身報身應身の三身如來の事て果滿とは佛果圓滿とて妙覺究竟の位に登れば因位の萬善果上の萬德自行化他の一切の大功德を圓滿具足して毫も闕減なきが故に果滿と申すて有ます内證と申すは内は内身として自身の事て證とは證得とてさとりうる事て有ます偕て是より内證の二字を辯じて聽せませう本佛の釋尊が何様に我が此の身を證り得たやと申すに我が此の四肢五躰の色法の境は無始本有常住の事法身の佛躰て有りしよ我が此の妄念の心智は無始本有常住の智報身の佛躰て有りけるぞ我が此の境智が冥合して法界の萬物に應對して愛憐の情の有るは無始本有常住の慈悲應身の佛躰て有りけるぞ然れば則ち我が此の身は無始本有常住無作三身即一の佛躰て有りけるを無始本有の見思塵沙無明の性惡の作用の強さに引かれて無始本有の性善の事法身の佛躰が性惡の無明の凡身と變じ無始本有の性善の智報身の佛躰が性惡の見思の惡心と變じ無始本有の性善の慈悲應身の佛躰が性惡の塵沙の無慈悲の身と變じて無始本具の九界

生死の煩惱海に沈没したる者なりと始めて我が身の上の本具性惡の三煩惱の迷を斷じ我が身の上の本具無作三身の佛躰に立ち歸り證りを得たるを内證と申すて有ます一旦斷迷開悟して本具の無作三身の佛躰に立歸へりたる曉には再度九界生死の迷の凡夫となる事は有ません譬は鑽石を鍛練して黄金となれば再度鑽石とならざるが如く其黄金の作用の莫大なる事は言を費すまでも有ません今又た其の如く煩惱の鑽石を鍛練して佛躰の黄金となれば其作用廣大無邊にして堅に三世横に十方に周徧して一切衆生に利益を與る事不可思議て有ます○本迹二門之肝要又此の一句七字は開迹顯本一部唯本門の法華經鉢内の本迹の法門を釋したる文て有ます偕て本門の肝要は能説の佛に約すれば本覺久成の三身果滿の本佛が肝要所説の法に約すれば壽量品所願の事具の界如三千の妙法が肝要て有ます迹門の肝要は能説の佛に約すれば始覺近成の迹佛が肝要所説の法に約すれば方便品所願の理其の界如三千の妙法が肝要て有ます然といひども本門は人法ともに能開の大功德を備

へて勝れ迹門は人法ともに所開の法なれば劣り依て宗祖大聖は一部修行本勝迹劣の法華經を弘通し給ひたるて有ます吾か開祖聖人は經卷相承して絶へたるを繼ぎ瘼れたるを興し本勝迹劣の法華經を弘めたるので有ます一致者流の徒が日什の在世は本迹一致の行者なりとは誣るもまた甚しき哉一致者流の輩古厝の經を用るの白癡なるもまた甚しき哉○先師弘通之本經也文此の一句八字は開迹顯本の法華經能弘の導師を擧て釋したる文て有ます先師とは我が開祖什聖は宗祖大聖人を尊崇して先師と御書になつたて有ます其所以は此の諷誦章の裏書の置文に云く日什へ者仰飯三日蓮大聖人一處也文是れ其確證なり又開祖の曰く但し六門跡の法義紛亂して富士にては富士正義五人無得道と云ふ五門跡にては五人正義富士無得道と云て互に排斥して止す依て六門跡の人々の法義の事は置て論せず日什は偏に宗祖所依の本經及び祖書を模範として弘めたりと仰置れたり○本經也又此の本經とは通途に云ふ所の本經本論と云ふ本の字の意味と同一にして宗祖本來所依の

經と申す事て有ます又九一義には本門三秘の妙經を本經と申すと今は初の義を正として然るべきて有ます

十法界抄講義 (第三回)

八十三老比丘 阪本日桓講演

難云小乗教者但是談於心生六界、(中略)豈非二云未斷見思、人乎此の第二重の文は大に分つて兩段先は問ひ次ぎは答へ初の間に分つて三段初め難云の下の八句四十六字は爾前及び述門の人は未斷見思の凡夫なる事を難じ二には故壽量品の下の九句三十八字は經文を取意し引て未斷見思の證據を擧げ三ツに豈非云の下の一句九字は上の間の意を結して難すは上分科也偕て此の間の文の意を講して聽せませう爰に小乗教と有るは常途の初一小乗後三大乗の三藏經を指して小乘經と申すては有ません是れは宗祖聖人の觀心本尊抄に判し給ひたる通り壽量品の一品二半を除くの外は小乗教邪見教と御書になりました法華經の述門、并に還迹流通の經を始め爾前の諸經を都て以て小乗教と指したるのて有ります其以所は次に壽

量品を引て難したるのて法華經本門壽量品の一品二半を除て一代聖教を小乗教と申した事が宛然と分ります此の下の文に心生の六界及び心具の六界と有りますが是れは心生の十界心具の十界と六の字を十の字になをしてよめば意味が能く分ります斯く申しても六界と書きたるが誤りと申すのては有ません此は見思の煩惱を斷ずる事を言んが爲に一往六界と御書になつたので有ます實は十界の事て有るから六を十と直してよむが宜しひので有ます偕其心生の十界と申す者は如何やうなる者ぢやと申すに人々の心の善惡の持様に地獄とも餓鬼とも又は菩薩とも佛ともなると説くのが心生の十界と申すて有ます其所て又た心具の十界と申す所以は心の善惡の持ちやうには抱わらず無始より十界の人々には皆な十界の善惡の諸法を具足して有る者なりと説を心具の十界と申すて有ます宗祖が所謂無始の事の九界の身に無始の事の佛界の身を具足し無始の事の佛界の身に無始の事の九界の身を備て十界互具して事の一念に事の十界の諸法を具したる者なりと判したるは此

の心具の十界のことで有ます其所て難問の意は法華經本門壽量品の一品二半を除くの外の小乗の諸教には但是れ心生差別の十界の法門を説て無始本有の心具の十界の妙法を談せざれば二乗の人々は無始本有の九界を具足したる事を顯わす事が出来ぬ左すれば但九界の煩惱を斷じて九界の生死を出離すべき道理が有りません其證據には法華經本門壽量品に説て申すには一切世間天人及び阿修羅と言れたるは凡て爾前及び述門の會座に列りたる人々也具に申せば三藏教通教在座の二乗又た通教別教圓教の三教在座の菩薩並に第五時の法華經述門在座の純圓の人々を悉皆天人阿修羅の凡夫て有ると本佛の釋尊是の如く斥け給へり豈未斷見思の迷の凡夫にして無得道の人て有ると難問したるのて有ます是より答の文を講して聽せませ

○答十界互具者法華淵底(中略)何無二四

聖高下乎此の答の文は分つて三段初の答十界の下六句廿七字は十界互具の法門は法花獨得の妙法にして他經に於ては龜毛兔角なる事を擧げ二に但四十餘年

の下三十句一百七十字は爾前の諸經の會座の人の當分の得益有る趣る答へ此の中に又た分つて二段初の但の十の下の二句八字は惣じて爾前得益の諸教を擧げ二に無數の下の廿四句一百四十三字は別して諸教を擧げ此の中に又た分つて七ツ一には無數の下の四句二十字は藏通二經に約して答へ二には塵數の下の三句十六字は別圓二教に約して答へ三には無量の下四句廿七字は序分の經に約して答へ四には於法華の下三句廿一字は正宗分の經に約して答へ五には如此の下の三句十五字は惣して諸經に當分の得益有る事を答へ六に但爾の下の三句十四字は爾前の諸經には開權顯實を説かざる故に實佛なき事を答へ七に又た不説の下の七句四十九字は爾前述門の經には開迹顯本を明さざる故に未顯真實の經なる事を答へ第三に不明六界の下九句五十字は問を反詰して答へ此の中に分つて二段初の不明の下の三句十七字は惣して反詰して答へ二に六界の下六句三十三字は別して其所以を辨して反詰して答へ已上分文偕本文を隨文消釋せざる前に辨して置き度き文が有ます此の

答の文の中に無漏果と申す語が有ます是れは阿羅漢果の事て有ます此の羅漢果を無漏果と名を附したる所以は此の人は見思の煩惱を斷じ盡して更に三界六道の生死に漏落する事なき果報を得たれば無漏果と申して有ます又た二種ノ涅槃無爲と云ふ語が有る此れは有餘と無餘との二種の涅槃と申す事て其所て有餘涅槃と申すは二乗が見思の惑を斷じ盡して不生不滅の涅槃の理を證しても未だ灰身滅智せずして生死の此の身の餘りが有るを有餘涅槃と申し又た無餘涅槃と申すは灰身滅智と申して身を燒きて灰となし心智を滅して五欲の念なく色心の餘りなきを無餘涅槃と申しまた無爲と申す事はする業なきと讀みて斷惑證理の修行の仕業なきを無爲と申します所謂所作皆已辨の人となりたるもので有ます又た淵底と沖微と申す語が有ますが孰れもふかきと申す辭て有ります又た不説一字と有ますが此れは全く書き誤りたるので有ます不説二字と書くべき譯て二事と申すは開權顯實の一事と開迹顯本の一事と此の二事は諸經には不説なりと云ふ事て有ます此の通り

實と説て是れを斥けたれども猶是、故、衆生、得道差別と説て三乘當分の得益を許して有ます又た法華經迹門正宗分に於て正直捨方便、但説無上道と説て爾前を捨閉すれども尙見諸菩薩、授記作佛と説て當分の得益を許るされたるなり此の通りの經文は爾前所説の經教に於て當分の得益を許したるにあらざる乎但し爾前の華嚴經を始めとして般若經に至る迄の諸經には迹門の開權顯實の一事と本門の開迹顯本の一事と此の二事を説かざるを以て眞實の三身即一の圓佛無しと謂ふので有ります猶又た爾前及び迹門の會座にては今の釋尊を久遠實成の本地の佛なりと説かざるが故に十信十住等の淺位の人々は云ふまでもなく等覺深位に上りたる文殊彌勒等の大菩薩に至るまで今の釋尊は十九出家三十成道の始覺近成の佛なりと執着の思が有る故に此の一邊に約して天人阿修羅の迷の凡夫の仲間攝しられたるので有る此の能迷の門家の彌勒藥王等の人は久遠實成の本佛を能覆したる執迹の生死の此の身及び執迹の煩惱の此の心を一時に斷壞して生死の身は

得意て御書を拜見して然るべきで有ます是れより本文の答の意を講します偕て御答へ申します御難問の通り十界互具と申す法門は法華經所詮の淵底の妙法にして此の法華宗の沖微の法義て有て爾前四十餘年の間の三七日所説の華嚴經……十二ヶ年間所説の四阿含經十六ヶ年所説の方等經十四ヶ年所説の般若經等の諸經に秘藏して説き傳へざる事はそれは争ひませんが但し争ひますのは得益の有無て有ます慈し申せば爾前の諸經には悉皆得益が有ます別して申せば三藏教通教所説の在座の無量無數の凡夫が三界見思の通惑を斷じて無漏の阿羅漢果を得て能く有餘涅槃を證り無餘涅槃を證り所作皆已辨の無爲の人となりし者も有り又た別教圓教所説の會座に來集したる微塵數恒沙の菩薩は界内見思の通惑と界外塵沙無明の別惑を斷じて頓に界内分段の生死と界外變易の生死二種の縛を切て九界生死の大海を超へて實報及び寂光の彼岸に亘りたる人々も有ります然るに法華經の序分無量義經に華嚴阿含方等般若の四十餘年の諸經を擧て以て方便、力、四十餘年、未レ顯ニ眞

無始本有の妙境にして煩惱の此の心は無始本有の妙智なれば我が此の色心は取も直さず境智冥合無始本有の無作三身即一の佛身なりと證らざるが故に始覺近成の佛の所説の爾前及び迹門の經教を唯だ未顯眞實の經なりと説きたる者て有る去ながら始覺近成の佛の所説の經たりとも其法會に在座したる九界の人々は當分の得益は許されたので有ると答辯したる文て有ます○不明六界の下の六句五十字は當家の難問を他家より反詰して答辯したるので有ます此の分科は上に辯じて聽せましたから先づ此の文の意を講じてきかせますが六界互具を明ざるが故に二乗は六道の生死を出離すべからずと云ふ此の難は甚だ不可なる譯て有る六界互具とは即ち十界互具の事て有るべし其十界互具を明すと明すと明ざるには拘らず爾前の經教にも十界がなければ成らぬ譯て有る何者なれば始覺權果の佛が説きたる心生の六界と申すは地獄は地獄及び天上界は天上界て六道の凡夫が各々差別にして互具せざる事を説きたる者て有る此の心生の六界は所觀の境なれば能觀の人に聲聞

と縁覺と菩薩と佛と四聖の高下の人々の無き事は有るまい乎然れば十界数の量の不足になる事は有るまい十界が不足なく有れば二乗が有りませす二乗が有れば此の二乗は爾前當分の得益を得て六道の生死を出離いたします何が故に六道生死を不可出と難したるやと反詰して答へたる文で有りませす此の一段の判文は語が簡略にして意味が深き故へ解了が中々困難で有ませす注意して聽講なされよ

佛教徒の自覺

秋葉顯正

一、人心と社會

社會とは一種の有機的關係を有せる團體に名けたる稱呼である、而るに俗間往々此語を誤用して居るものが多い、例へば碌々として道路に羅列せる甲の石と乙の石とは別に何等の有機的聯繫あるものではない、亦雖然として生ひ繁れる草木の間に於ても其通りて全く無

關係である、而るに或は石の社會とか草木の社會とか云ふが如きは一言語の意味合ひを知らずして使用せる誤解であると思ふ、之に反して人類相互の關係は最も密に近連せる最高等なる連鎖を有し、甲の云爲行動は直に乙丙に影響し乙の一舉手一投足は亦丙戊に影響し、有史已來綿々として殆んど底止する處がない、かくの如く精神的連鎖を有するのみならず元來團體的生活を全ふすべき本能を有して居る、是人類の社會的動物と稱せらるゝ所以ではあるまいか、それ故に吾人は單なる自己にあらずして利害關係を社會に有せる事を自覺し、人生に處するに當りては自己の云爲の善惡是非に留意して、少なくとも社會的徳徳を勵行せなければならぬ、若し極端なる自己中心の主張を取て、所謂「人はどうてよい」と云ふ様な立場から人生に横行活歩せんとするならば、それは全く人類の社會的自殺と云はざるを得ない、彼の自己の腹肉を抉つて藥用とするの愚と一般である、是れ人類の性能が多くは自己中心にのみ傾注するに拘らず、自愛説の倫理が學説として

全きを得ざる所以であると思ふ、かくの如く現世一端の倫理として眺むるも社會の一員たる吾人は大に自己を反省して徳義を嚴守するの切要なるのみならず、佛陀大悲の大意輪中より宣傳せられたる三世因果の大則に鑑み來らば戦々競々として常に改過遷善の大懺悔を御寶前に誓はざるを得ない、況んや職に教育家の大任を奉じ、社會指導の卒業に従ふもの、深く人心と社會との交渉に鑑み、宗教の社會に及ぼせる影響を尋ね以て大に人類の治善と社會の發展とに貢献せざるべからず、

近時社會主義の唱道者著しく膨脹し、一面頗る危険なる思想を傳播するものがあるが、誠に寒心に堪へざる次第である、吾人は社會の一員たると同時に亦大日本帝國て國家の一員なれば、單純冷靜に社會本位の理屈にのみ満足する能はざるは、識者を俟て後知るのでない要は唯社會主義と國家主義との調和を計り社會本位と國家本意との圓滿妥當なる解決にあらふと思ふ、何はともあれ膨脹的大日本が戦後經營上百般の設備を

要するも之が根本基礎たる社會人心の改善發達は思想界指導の大任を帯べる、吾人宗教家の大飛躍に期待するもの多々益々大なりと信ずる、進莫全國千萬の圓顛見渡し來れば真に斜陽重荷を負ふて險山に向ふの慨なくんばあらず

二、宗教の兩側面

宗教と云へる名辭も之を解剖し來れば左の二側面に分れる、即ち主觀的宗教と客觀的宗教との二側面を有せる如くに思はれる、王觀的側面の宗教とは吾人の精神上の意識にて、心理學上の所謂智情意の包含せる一種の宗教信念の情操即ち安心立命とも光明とも名くべきもので學者時に哲學的證信と云ふて居るが勿論時代と方處とに依て上下淺深等知識の程度に萬差を生ずるを以て其信念の内容に自から千萬の階段を有して居る若し彼の理學者の所謂舊石器時代に始めて人類が此の世界に出誕せるものとせば此時已に人心にかゝる宗教的信念の萌芽を有して居る西哲の宗教は年と共に古しと云はれたのは蓋し此邊の消息を道破したる言であらふか

爾來綿々として近世に至り如何に凡百の學術進歩し來るも宗教信念の存在を否定することは出来ない、換言すれば宗教信念は吾人精神の固有である、在經の明月である、籠中の鳥である、本有の佛性である、次に客觀的側面の宗教とは、本尊經卷教義信條儀禮等を指すものである、蓋し何れの宗教にありても少しく發達せる宗教ならんには、經卷教義を有して一種の哲學的實在論を假定して居らざるものはない、其本尊觀に至つて佛敎中禪宗の如きは經卷を否定し佛像を排捨し、ひたすら凝思調心の坐禪三昧に耽り全然本尊の必要を認めざるが如き觀ありと雖、尙且つ劣應身の佛陀に拜跪せるあり、之を要するに佛敎行門の上に於て信行系に屬せる一派が盛んに本尊佛陀の崇拜等形式的有相信行に流れ何等精神的工夫を遺却せる像法時代に(諸佛遺塔)ありては其が反響として極端なる觀念系の無相行門を骨張し佛阿大慈の攝護を忘れて遂に直指但心の魔見に墮落せるが如きは蓋し時勢の趨向する處にして、誠に止むを得ざる現象であらふと思ふ、さりながら何れの宗

教にありても吾人々類と人類已上の偉大なる超人格の實在を認め、吾人の信念祈願と超人格者の慈愛攝護と此間の關係交渉を論ずるに感應の妙義を以てするのである、それ故に是が推論の結果としては本尊論と罪惡觀との思想を惹起し來るは必然の道理と云はざるを得ない、

此頃比較宗敎學の進歩につれて、次上に繰述せる宗教の主觀的側面(主体)と客觀的側面(客体)との研究益々發達し此主体と客体との意義を極めて明瞭確實に認識せしむるを以て最も進歩せる宗教の能事として居る、吾人は此れが研究を怠らざると同時に、自己の天職を自覺し異端石出せる現時宗教界の客體論上の迷謬を打破し、此客體論上の迷謬より影響せられたる社會の、道義地を掃ひ人心日に墮落し殆んど取捨すべからざる邪思惟邪信念を調整して、主体信念に活生命を與ふるは眞に過渡期思想界焦眉の問題であつて亦實に吾人の社會的德義であると思ふ、切言すれば宗教改革の問題は最も人類に接近せる積極的社會救済の根本問題に

して亦自己の社會に存在を全ふする所以である、

三、社會と日蓮上人の宗教

己に宗教心は人類の生成當初より人心の奥底に潛み宗教的天才の現出を俟て宗教の客體顯はれ、やかて社會の一現象として現れたるもの所謂成立宗教にして前に述べたる如し、尙ほ成立宗教以外幾多の宗教現象あることは事實である、而して何れの宗教にありても、其主体と客體とに論なく、深く社會に交渉關係を有し宗教の一浮一沈は直に社會の興廢に至大の影響を及ぼしを以て宗教家の對社會觀は一に其宗教の優劣を卜知すべきである、吾人は以下日蓮上人の社會に對する御働作に就て卑懷を述べやうと思ふ

元來宗教は社會の一現象なれども、一面に於ては彼の三世を説き天國を豫想し、地獄を論ずるか如き超社會的意義を有して居て、而も夫れが教義として深遠なる所以である、此幽邃高砂なる教義を奉戴し依て以て人生社會を開導すべく社會の逆潮に向て、奮闘を試みたのか日蓮上人一代の慈悲である、

凡そ吾人の眼前に横れる社會の現象は、千態萬狀復雜多様なれども、其復雜多様な現象が悉く吾人々心の產物なりとせば、人心の調整啓發を以て一世の能事とせる宗教家の責務亦頗る重く殊に社會の元動力を、幾多他方面に顯れ來る人心に取らずして、全然此の宗教信念の根底に築て鞏固なる宗教改革の意見を持せる、日蓮上人の主張に於ては、層一層甚大なる考慮を要すべく、吾人は常に立正安國論、十一通御書等の幾多警世の大文字に接して、無限の靈感を得るを覺ゆ、かくの如く日蓮上人の宗教が第一義諦即ち絶待善の上より社會を救済せんとするは、此宗最後の究竟目的なるも此絶待善に開會せられたる、世善德義の考察點より現社會を眺め來れば、尙幾多の論導すべき筋目があると思ふ

由來佛敎が其經卷の廣漠なると、其敎理の幽玄微妙なると、其制戒の峻勵なると、其歴史の悠久なると、是等の事情錯綜して、徒らに從來學術の徒をして弊害百出、理論に走り空想に陥り世間に遠かり人道を遺却す

る等の缺點を生せしめ、因襲の久しきに凝て覺醒の期に至らず、唯我日蓮上人の佛教と、淨土念佛の教理とは、併せて平民的社會的改革の福音をもたらしたるも、法然親鸞は一片形式のみ、教理の根柢永く教祖の大興に背きたる大謗法なれば論ずるに足らぬのである、

あゝ日蓮上人の至孝なる、身延山頭思親閣に於ける九箇年の禮拜を躬行し、一切衆生の異の苦を受くるは日蓮一人の苦也と訓へ、法の爲め君の爲め一切衆生の爲め也、と極諫して、一世六十年間大小幾多の迫害に挺身奮闘、始終一貫、實社會に突入して、人生救済を全ふせる四恩報答言行一致の壯觀は眞に宗教史上の花にはあらざるか、佛教が八萬四千の大法門を有すと誇るも若し此の實踐躬行の四字を去り報恩の大道を遺却せんか、夫れは死佛教のみ、人生に於て何かあらん、獨り日蓮上人の宗教が活々潑地として人生に寄與し社會を利導するが如きは、眞に永きく佛教開闢史に一點の光明を與へたるものである、かくの如き四恩報答の倫道も現今道德學者の如く、若し淺薄に現世一端に

局して、之を論せば甚だ價値なく寧ろ學理の究極する處、人心をして懷疑惑亂に陥らしめんのみ、而るに佛教三世徹底の因果律に照し來りて、報恩の大道を眺むれば茲に始めて生命あり活動あり光明ある倫理的衝動を惹起するのである、更に進んで日蓮上人の宗教に至りては佛教最後の眞髓を捉へ待絶兩善の妙義を盡して三世に亘りて普く四恩報答を全ふし茲に始めて倫道としての佛教に最後の點睛を與へたのである、

かくの如く日蓮上人の教ゆる處に依り社會救済の大徳教を確立して腐敗濁濁の絶頂に達せる現時の邪思惟邪信念を撲滅せんと欲せば、勢ひかゝる邪思惟邪信念を播種せる幾多宗教の客体に向て拆伏を強行し其絶滅を期して宗教的主体の調整敬發を庶幾せんければならぬ、日蓮上人が「日蓮魁たり、若黨共二陣三陣とついで云々」と號令し、挺身折伏毒鼓の旗幟を翻して佛教統一を叫びたるも、一に四海歸妙五風十雨の盛代を現世に致さんと社會救済の慈悲に外ならぬ、あゝ嚴乎として犯すべからざる大號令吾人門下の末席を汚

すもの、三世因果の嚴規を信ずる上は、教家の天職を自覺する上は寤寐にも忘るゝ能はざるのみならず、已に論頭に述べたる如く、社會の一員としての吾人は苟も自暴自棄と社會的自殺とを甘諾する能はざる以上は、少なくとも社會救済の聖業は片時も忽語に附すべからざる緊要至重の問題たるべきを知るべきである、曾て日蓮上人が「汝一身の安堵を思はゞ須らく佛法を立つべし」と仰せられたるは、眞に此社會的自覺の上に國家の救済を絶叫せられたる聖聲である、あゝ一息天下に存する間眷々服膺すべき萬世不磨の大教訓なる哉

宗門經營の理想

井村 恂也

題して宗門經營の理想といふと雖も、但なる理想にあらずして、現宗門の實質を基礎として其活用の方法を論究する考へであるから、豫め其意を体して一讀を願ひたいのである、凡そ各宗とも當路者なるものは夫々理想を抱いて、其宗門經營に任じて居るのであるうが

未だ模範とすべき丈の經營方針を實行して居るものは無き様である、それも多數の末寺を有し多數の宗費を徵集し得らるゝ宗門は、其經營に苦慮する事も少いてあるうが、少數なる末寺を有し年額三四千圓位の宗費を以て一宗門の經營をなすと云ふことは、超凡の手腕を有するものにあらざるよりは到底困難なるを免れな、現今の如き分裂したる佛教が萎靡不振に陥るは理の當然であると思ふ、此儘放任して置けば滅亡の外は無いと信する、進んで統一進取の方針を取るか、退いて滅亡の時を待つか、何れか一方を擇ばねはならぬ實狀である、吾人は過去數年間宗門統一の呼びをなすも未だ何等の返響がない、して見れば滅亡を待つ人が大多數であると見へる、然し吾々は統一問題が困難であると云ふて拱手滅亡を待つて居ると云ふ事は出来ぬ、縱令宗門小なりと雖も相當の經營方針にあらば敢て發展し得ぬ次第でもあるまいと信する、他宗門の事は暫く之を措き、予は茲に予が懐ける宗門經營上の理想の一端を發表し、教て大方の示教を仰がんとする

次第である

宗門經營問題を論究する順序としては、現宗門の實体の如何なる分量を有するやを提示せねばならぬのであるが、便宜上之を次回に譲り、今は先づ宗門の實力即ち基礎となるべき各箇寺院の經營方針を論究して、後に宗門經營の事に及びたいと思ふ、宗門は各箇寺院の集合体にして、各箇寺院は宗門の組織分子である、各寺院の基礎確實ならば隨而宗門の基礎は確實である、之に反して各寺の基礎薄弱なるに於ては宗門の事業は如何に企てらるゝも、決して成功すべきには無いと信ずる、依て各寺院の經營方針を研究し、其を基礎として宗門經營の論究に移らんとす

各寺院の經營問題

に就ては現今各寺院が取りつゝある方針(？)所謂今日主義なるものは永續すべからざるものと見ねばならぬ各寺収入の程度が現在在職一人の生活を支へるのみの現状を以てしては、到底何等の施設を爲し得ざるのみならず、宗門的經營に盡すの餘地が無いのである、故

に各寺經營の方針は此際是非一變せねばならぬ必要に迫つて居るのである、此に就ては目下各宗門の問題と爲つて居る、寺院合併を適度に實行して行けばよいと思ふ、實際現今佛教の寺院はあまりに多數にして俗に所謂共倒れの状態であることは明である、

之を適度に廢合して各箇寺院の基礎を作るべきは刻下の最大急務である、政府當局者茲に見る所あり、昨年勅令第二百廿號を以て、寺社合併跡地官有地の無代交付の件を發布せられ續いて内務大臣の訓令となりて各派管長及府縣知事へ寺社合併の手續をなすべき様達せられまして、各宗當局者及各府縣に於ても、夫々合併の方針に就て研究中との事に聞き及びました、勅令の趣旨及内務大臣訓令の目的は多數の基礎薄弱なる寺社よりも、例令少數にても基礎の強固なるものを存立したしとの意味でありますから、此の主義方針は尤の事にて、敢て反對の聲も無からうと思ふが、舊式佛教者側に於て聞々反對の聲を聞く様である、寺院の合併とは佛教の縮少とても思ふたか如く、寺院の合併は佛祖

に對して一種の罪惡にても犯すが如く思ふて居るは單に形骸に執着し堂塔の美を以て佛法の興隆なりと思惟せる一愚見に過ぎざるも、此の如きの愚昧なる意見を有せるもの現時佛教家と稱するもの、大部分を占むるに至ては誠に歎はしき次第と言ねばならぬ、然て我々は斯る考へは持つて居らぬ、形骸的佛教は滅亡せる佛教で、生ける佛陀の慈悲は形骸に存せぬ事を主張するものである、堂塔の數の多少は敢て佛教の興廢に關するもので無いと信ずる、寧ろ今日の如き無意義なる堂塔は全然破壞し去つて差支ない事と考へて居る位であるから、内務大臣訓令の主旨には双手を舉げて賛同するのである、然しながら此

寺院の廢合は如何なる程度

に於て爲すべきは研究問題であります、内務大臣の訓令に於ては法要行はれず云々として、但に寺院の實務を擧げざるものを指し、又各府縣に於ては夫々社寺廢合に關し府縣令を以て標準を定め、若しくは定めんとしつゝありませすが、新潟縣は五百圓以上山口縣は千

圓以上の基礎を有せざるものは廢合せしむるとの事なるが、五百圓と云ふも千圓と云ふも何等方針あつて定めたる標準とは認め難いのである、各宗當局者に於ても未だ標準に就ては確たる方針の定まりたるものは無い様である、此等は畢竟するに一寺院の經營の方針が確立せぬ故從て廢合の標準も立たぬものと思ふ、一寺院の資格を限定して其以下のものは凡て廢合すべきものとし數寺を廢合して一寺院の資格の限度に至らしむるを標準となさば宜敷と思ひます

一寺院たる資格

は如何なる程度を以てするかと云ふに、大体としては從來の堂塔を維持し、檀信徒の感化を爲し、永遠に持續することを爲すことが出来る丈の收入を得る途があるのを以て、一寺院と見做すことを得ると言はねばならぬ、從來の堂塔も維持することも出来ず、將來に持續する方法も立てられぬ様な寺院は、獨立の資格なきものと見てよろしい、茲に言ふ處の將來の持續と云ふ事は、堂塔維持の意味でなく、法燈持續即ち徒弟教養

の意味である、此を費目に分類して言へば、堂塔修繕費、住職生存費、布教費、徒弟教養費の四項目である之を總収入割合にて示すと先づこうである

| | |
|-------|----------|
| 堂塔修繕費 | 總収入ノ十分ノ二 |
| 住職生存費 | 全 十分ノ三 |
| 布教費 | 全 十分ノ二 |
| 徒弟教養費 | 全 十分ノ三 |

此の内布教費及徒弟教養費の二は箇人的と宗門的との兩様に分たれる、兎に角此れ丈の仕事が満足に出来ねば一ヶ寺と認められまい、何故かと申すと、縱令堂塔の維持と住職の生活が出来ても、宗教の生命を注入する布教と、後繼者たるべき徒弟の教養が出来なかつたならば、將來の持績は出来ぬので、但現代の住職限りの寺院となつて仕舞ふのである、一寺院として存立する以上は、堂塔の維持と共に、布教及び教育の二途に費すべき相當の餘裕が無くてはならない、現時の各宗寺院の状態は如何、能く布教に堪へ徒弟教養の義務を爲し得らるゝもの其數幾何であるか、其大多數は堂塔

の維持と住職の生活を漸くなしつゝあるのみ、甚しきは住職の生活は勿論堂塔の維持さへも覺束なきの有様である、此等の如きも寺院明細帳には一寺院として登載せられてある、國內七萬二千餘ヶ寺と言ふも其資格を調査せば一寺院と認むべからざるもの約三分二以上はあるであらう、そこで一寺院として前申した四ヶの費目に充當するには大凡何程を要するかと見るに、少なくとも一千圓の収入がなくてはならぬ、一千圓の収入を前地の割合で割當てると、堂宇修繕費に二百圓住職生存費に三百圓、布教費に二百圓、徒弟教養費に三百圓の割合である、此以上には切詰められないと思ふ、そうすると先づ一千圓の収入が無ければ一箇寺の資格が具備することが出来ないのである、現今の寺院中一千圓の収入に充たぬ寺院は一千圓の収入ある程度迄適宜廢合處分を爲す必要がある、寺院合併の義に就ては希くば政府當路者に於ても今一步進んで廢合の意義を一層適切にし一定の標準の下に強制的に斷行せらるゝならば其結果は豫期以上の事と思ふ、然し此に注

意せねばならぬ事は一地方に數十百ヶ寺纏つて居る處は差支へないが、一府縣に四五ヶ寺と云ふ場所の如きは必ずしも前記の方針では行かぬ、斯様な場合には宗派より相當の保護を與へる様にでもせねばなるまいと思ふ、先づ一箇寺院の經營を前記の標準に依り爲すものとして之を現今の宗門に應用して如何なる結果になるかは次第に論述しやう

(未完)

讀誌所感

經王道 人

昨年三月改善せられたる本誌は、主筆の啓發指導の下に同人諸子が敏腕健筆を揃へて、組織系統ある範疇的說教を連載せられたるあるは、愛讀者たる吾人が深く欣仰措かざる所、或者は稱して本誌は單調なりと評するも、而かも我國幾多宗教雜誌中文書傳道に適當なる純布教雜誌として吾人の最も推稱する所なり、故に予は既往一ヶ年餘の本誌を通覽して茲に編輯局の諸子に對し聊か所感を告白せんとす

抑も本誌が會て統一團報と稱せし時代の終期と今の統一と改題せし初期に涉り記事の難駁なりしことは、毎に遺憾とせし所なるが、近く兩三年已來に至つて頗るその体面を一新したるとは喜ばし、殊に昨年改善は隨に一大進歩なりと覺ゆ、これ予が今聊か管見を陳せんとする所以なり

本誌は已に題して統一と稱す、これ蓋し小にしては我國現在の宗教を統一し、大にしては世界幾多の宗教を統一せんとする主義を標榜せるものなるべし、果して然らば本誌の内容が先づ自から進んで統一せらるべきとは固より論なかるべし、されば予は會て密かに惟へり、誌上の論說講話はその同人の手に成ると若くは寄書に係るとを問はず、その主義主張に於て毫も矛盾撞着なかるべし、假令全く然らずとせんも少くとも同人の手に成るものは必らず總て統一せらるべしと、され予の實驗する所に據れば、予が斯の豫想は稍々當らざるものあるが如し、近き一例を挙げれば本尊の主張に於て佐島始顯を鼓吹する講説を見たり、蓋しこれ夙

に彼の妙宗一派の唱導する所なるも、本宗の解釋意見は決してしかく偏狹未圓熟のものにはあらざるなり、又祖傳に於て見るに、近く開宗の巻に於て聖祖の家系を泰堂一流の藤原氏とし、聖祖當時の清澄寺を東密とするに反し、曩に出てたるものには縮刷違文の御系圖に従へる聖武天皇後胤説、清澄山宗旨考の説を援ける台密説あり、然らば本誌の意見は果して孰れを是認せらるゝか、吾人讀者に於ての判断に惑はざるを得ずその他微細の事に至りては一々これを擧げず、要するに吾人が本誌を愛讀するとは已に述べたり、尙ほ吾人は同志と共に毎にこの模範説教を叮嚀反復しつゝあるなり、故に吾人の眼に映ずる矛盾撞着は遂に吾人をして本誌の價値を疑はざるを得ざらしめんとす

模範説教が言文一致体を以て顯はれたるは最も嬉し、三五の同人はその文体能く調整して間然する所なしと雖も、中には前後不統一の文体を以て顯はるゝもの亦尠しとせず、例せば一文章の中に於て「あります」と「ある」といふが如き語尾の一定せざるもの、或は間々

文語を混入せるものあるが如き、又は全文文章体に成り只僅かにその語尾を口語にせるものあり、これ等は意義に於て固より増損なきも、吾人讀者がこれを口耳に上げずに當り頗る佻倨傲牙なり海濫生硬なり雅俗混淆なり、延ひて意義の疎通を妨ぐ、されば諸子行筆の際今一再の鍛練を加へられたし

同人のものに就ても已に如上の瑕疵あるを見る、然るに尙ほ間々二三寄書家の説教をものせらるゝあり、その事たる固より頗る歓迎しつゝありと雖も、中には爲めに却て誌面の光彩を減殺するものなしとせず、されば尙後は寄稿の採擇に就て十分なる用意を拂ひ、必ず同人以上若くはそれに比肩すべき底の名案卓論にしてその行文亦優に三唱に値するものを掲出せられんとこそ望ましけれ

次に大説教の全系を案するに十三篇五十八章と十三小目あり、而して昨年改善以降十三ヶ月間に掲出せられたる教篇は實に五十六回に及べり、されば只軍に回数の上のみより見れば、殆ど各篇各章に涉りて一順演了

せられたる割なり、而かも實際は同一の篇章を再三復演せられ、その多きは五回に上ばれるものすらあり、爲めに教法篇の如き未だ一回だも掲げられず、若し全系に涉りて未出のものを檢すれば尙ほ三十九の章目を餘ませり、これ等の事元編輯上の都合に屬し吾人が濫りに容喙すべからざる事項たるべけれど、希くは大説教開始當時の宣言に隨ひ尙後は可成各章目に涉りて平等輪次に講述せられたし

教學財團の盛舉は着々歩武を進めて今や好果を呈しつゝあるは、吾人の最も欣躍措かざる所なり、思ふに全國各地漏なく勸募に應じ終るは將に近日の内に在るべし、然る上は宗内各寺院の等級と檀家總數とを基として、これに應募者數と金額とを對比して出資の割合を較量せば、各地に於ける宗勢を觀るの一端として頗る趣味ある統計を得べき乎、要するに財團設立の際に於ける宗勢を窺ふに足るべき統計を案出して吾人の好尚を充たされんとを當務者諸子に企望するものなり

雑報の記者は多く各地の通信をその本文の儘掲げらる

ゝとは、事實の眞を失はざる點と編輯上の勞を節減するとの利あるべし、然るに一方より觀れば通信者その人に依りて固よりその文体一定せざるべきも、中には往々繁冗誇大に失し頗る厭ふべきものあり、これ等は編輯の際便宜減省して簡潔に摘記し、世の新聞紙のその如くにせられたし、若し又さる手数を煩はし難しとせば、一面通信家それ自身に於て努めて冗漫なる筆を弄せず以て有益なる誌面を徒占せざるやう更められたし、これ蓋し事小なるに似て實に本誌の改善と相待て、誌面の威容を保つ上に於て決して等閑に付すべからざる要件たらん、將た各地の團友諸子に告ぐ、各地に於ける教況は宗勢の如何を窺ふに足る趣味あり利益多き事項に屬す、故に奮て通信投書の勞を執られんとこそ望ましけれ、吾人は始終或る一定地方の教況のみを見て決して満足するものにあらず、普く全國一般の教況を知らんと欲するものなれば、團友諸子曩くば吾人の要求を充たすに吝なる勿からんとす

以上予は既彼一年有餘の間に於ける本誌に對する所感

にして、又これ愛讀者一部の意見を代表するものと看
做すを得ん乎、されば敢て同人諸賢の尊威を冒瀆して
一種の建議案を捧呈するものなり、惟ふに仁慈なる諸
兄の雅懐は能く吾人の不遜を罪せず斯の献芹の微衷を
納れ、益す得意の健腕を奮つて必らずや近き將來に於
て本誌をして光彩離陸たらしめらるゝならんと信ず、
恐々

はしりかき

木 寸

博覽會日和と云ふのか何だか知らんが、しとく〜と
ろぼ降る隔日の春雨、又かいなと氣もくさく〜の折柄
編輯局から何か書け、ろら書け、まだかと矢の催促
こんな時には眞面目の法話よりもと、勝手ながら思
ひ出の走り書

或教育會の機關雜誌で、前田博士の紙碑の説と云ふ
のを見たが、それは近頃戦死者の効を録した石碑を、
競争的に建設する地方の風習を評して、悪いとは云は

碑も今後は可及的紙碑にすべく望む、少なくとも自分
丈は是非紙碑にと、今から弟子共に呉々も示賜して置
く、効は無い迄も責ては荷厄介を後生に残したくない
から

是に就ても思ひ出すのは、先年師匠の新盆會に、蒸
物を參詣者に配る地方の習慣が、如何にも氣に喰はな
いので、少額ながらその金を轉用して、一千部の施本
をした、處が或先輩から、今の若い者にも困る、數百
年來續いて慣例を夢間に踏み潰すと云ふ事があるか、
生意氣奴がとの御託宜を拜聴した、ハテナ自分は未だ
若いものかしら、自分は生意氣奴かしら、爾云ふ事を
仰しやるのが先輩の義務かしらと思ふた、何は兎なれ
此施本の内一割位は確かに讀んで呉れる、随て何等
歎の印象を讀者の頭腦に残すと、非常にうれしく思ふ
た

その後三回忌の節に、此度は大々的に施本をと思ふ
たが、法兄弟共から、世間体もある是非石碑をと泣き
着れて、今から考へると自分の確信が弱かつたに違ひ

んが、そんな事に莫大の金錢を投ずるのは考へ物で、
ならう事なら石碑は、ほんの紀念までに極質素に造る
事にして、寄せ集めた同情の籠れる金錢もて、何か有
益な印刷物として、世を益すると同時に、戦死者の芳
名を廣く長く保存する事にしたいとの御説、如何にも
有理の次第と、自分は思ふた

先年物故せられた藤乘老師が、口癖の様に、今のね
所化達は寺を持つのでなくて、寺にもたれるのだから
困ると、云はれた事を記憶して居るか、それよりは今
一段進んで、持つのも、もたれるもない、僧侶でもない
はカラつてしまふもので、一代何十年空衣徒食何の仕出
來した効もなく、極々上等の分てからが、難癖なく一
生を過したと云ふ迄のこと、死後は荷厄介の石塔が
一本殖へるのみだ、宗勢の振はんのも尤ではないかと
本多管長の慨歎談、成程間違ひもなく、自分共も早晚
荷厄介の石塔に化ける連中だ、慚愧の至りに堪へられ
ない

で、戦死者の紀念碑を紙碑にすると同様、僧侶の石

ないが、結局心ならずも石碑を建てた、其石碑は餘り
立派でも無つたが、それでも數十金を費した、數十金
を費して所謂荷厄介の品物を一本殖した、考へれば考
へるほど、如何にも残念だ、その金を轉用して印刷費
にしたならば、從來寫本で傳へ來つた先哲の著書若干
巻を、優に縮刷し得たるのみならず、亡き師匠の靈魂も
此方を如何ばかり嬉しく受けて下さるて有たらうに
可憐骨を折て馬鹿な真似をしてのけたと、今以て殘
念でたまらない

さて亦、この紙碑は死人の爲めのみかと云ふに、自
分は寧ろ死後よりも生存中と思ふのである、自己の
死後後弟子共が、して呉れ様か呉れまいが、そんな
事には頓着なく、自己の生存中自己の力の及ぶ限り、
紙碑を何萬何億と少しも多く立て、置く心掛けを、極
力發願するのである

或中老の方が、拙僧は病身で明日をも期し難き身だ
から、僧都の現地位で死ぬるのは残念、少々位運動費
は出し、しやうから、どうか後生の土産に僧正に昇階

して貰い度い、而して僧正日○上人の石碑を自分で建て、置たいとの、鼻汁まじりの泣き言を聞かされたと、學友の某君がこぼすまい事か、聞く自分もナールホドとかんすん仕つた

こんな和尚三達は、死んだ後まで俗的名譽に氣が引かれて居るのだから、逆も満足な臨終は出来なからう、それに復後生の土産とはオードロイタ、地獄の里も金錢次第と云ふ事は聞たが、靈山往詣に僧階が入用とは、珍無類いかに初耳だ、祖書の一冊も拜見したなら斯様な妄想は消へて仕舞の筈だが、和尚三小説本は好だが、祖書は一向讀まないといへる、こんな厄介和尚には、手取り早やに此石碑の効能を知せたい

石碑と云ふ事は至極結構なことで、どうか今後盛大に流行せたい、それとも石碑が不得手なら、舌碑(舌碑とは經文に演說微妙法とあるのを云ふ演說說教等辯論に屬するものを斥す)を勉強して、他人をして轉じて之を紙碑たらしむるも、又一方法である
何しろ、石碑に莫大の金錢を掛けるのは、馬鹿氣切た

及び演題は右の如し

開會の趣意

信仰の分類

法華經の真意義

教學財團勸募

國分 顯有師

渡邊 乾航師

萩原 啓門師

石橋 端嚴師

要するに當地は諸宗入交り聽衆も概して權門の族ら多く依て折伏を専らとし渡邊師は迷信を打破して一乘妙法の正信を知らしめ萩原師は一代聖教の歸する所を知らしめて大ひに佛陀の本意を顯し石橋師は宗教の發展を論じて清靜の擡越たるべきを論ずるに果して機縁に於ても大ひに乾田降雨の思ひを爲し就中四五名の權宗の僧侶は心竊かに正法に歸依し遂に本尊に對ひて唱題を試むるに至りたる追かに一乘感化の著しきを見るに足れり午后五時閉會を告ぐるに聽衆猶解散せず多くは辨當持參にて引續き夜の幻燈會を拜觀せんと欲すればなり此の夜日暮よりの雨は雪となりて寒氣殊に甚しきに關らず參觀者至つて多く午後七時より日蓮聖人の一代記を始めしが就中萩原師の説明尤も妙を得且つ詳かにして只皮相の説明に止まず大ひに本化の内容を顯示し參觀者をして隨喜渴仰の念を惹起せしめたり同十二時に至つて閉會を告げ夫れより夜を徹して同寺檀家總代人に對し更に財團勸募を爲して其の贊助を宛め猶檀中を擧げて寄附すべき様態篤依頼せり
翌三月一日は天氣快晴となり豫定の如く鶴舞三月離市の繁昌を械會として道路布教を爲すの賦にして内田を

次第で、好んで荷厄介を殖すのは、少くとも考へ物だと心付て欲しいのである

雜報

布教傳道團

顯本法華宗第三教區に於ては嘗て有志傳道布教團を組織し連月一回づ、茂原町内其他要所に於て道路布教を爲すとし已に本月は始めて第一回を行ひたり其の主意とする所は専ら迷信を排除し宗義を擴張して閭浮統一の最大事業を奨励するにあり先づ當月二十九日には縣下一二の振敷月六際の市場を機會として旭日輝く妙法の旗漫茶羅及び顯本法華宗布教團の旗旗とを高く翻へし管事石橋端嚴師布教師萩原啓門師木村乾中師渡邊乾航師其の他大川日教師國分顯有師氏小竹高方等盛んに法鼓を鳴らし宗歌を奏し町内各所に於て大ひに弘通を勵まして順逆二縁を利せり

三日間布教

内田本田寺栗原灌師と相計り二月二十八日布教として演說幻燈會及財團勸募を爲すとし當日は午前十一時管事布教師出張するや準備周到にして三四十名の聽衆は已に繰込み直ちに午餐を喫し即刻閉會するに大衆堂に充ちて殆ど立錫の地なきに至れり當日の出席辨士

發するや本傳寺檀中篤信者四五名外護となり我等に付添ひ妙法の旗を掲げ隊伍齊々鶴舞に至る已に群衆雜沓せる其の中を推分けて弘通を開始せり而るに此の地方は只權門のみにして殊に當町は鶴舞不動とて世に知らぬものなく多く迷信の中集せる所なれば専ら強折の利劍を振舞すに周圍山を築ける群衆は怒るが如く怪むが如くなりしも誰れ一人抵抗するものなく或は道傍に依り或は人家の檐下に立つて町内各所に獅子吼せしが諸天善神の我等を冥護し玉ふが故か將我等の熱心なるに感じてか或人は腰掛を取り出し毛布を敷き茶菓を勧めたる杯最も奇縁に感じたり
午后四時鶴舞を引揚げ又豫定の如く約二里を隔てたる應南長圓寺に至り宿泊す當住職飯塚至善師も町重に我等を迎へ翌朝二日午前飯塚師と打合せ檀家總代人を聘し財團に付懇談の上其の翼賛を宛め午後より飯塚師の案内に依り所化を隨へ法旗を翻へしめ石橋管事萩原渡邊の兩布教師同町各所に於て布教す當地は又他宗權門多くして毒鼓の響き高く大ひに折伏弘通するに町内各寺の權門の僧侶四五黨を與み我等を妨害せんと企てしもの、如しと雖獅子奮迅の勢ひに彼等は到底當るべからず只前後に出没するのみ斯くして我等は町内小學校教員等の待遇する所となり教育上有益なる演說を希望されしが時當さに約四時如何せん充分の時間なく遺憾ながら他日を約して歸途に就く
▲岡山教況 去る二月十九日午後七時より當市本行寺

に於て例月の佛教演說會を開會せり職衆無慮百五十有
余名あり當日の出席辯士及び演題は

國家に對する聖訓
佛陀の眞意と佛教の蹄趣
受持信念の要義
尙ほ去る三月十七日午後七時より全寺に於て佛教演說
會を開けり傍聴者殆んど二百有餘名に達せり當日の出
席辯士及び演題は

熊代 事觀師
松崎 事成師
原田 容廣師
能仁 事一師

▲庫裡改築 全本行寺に於ては寺主能仁師の熱誠なる
布教と檀信諸氏の熱裂なる信仰とに依り奮て淨財を喜
捨せしより愈よ過般來より庫裡改築に着手するに一決
めし已に木材等の入れ込を爲し居れり我が岡山教團の爲
め祝すべきの盛事なりとす

▲中央青年會發會式 拜呈翠柳淡烟を罩め櫻花欲笑の
候尊堂愈々御清穩奉賀候陳者來る二十八日正一時より
神田一ツ橋帝國教育會館に於て中央青年會發會式を兼
ね建宗會并に大演說開催仕候條萬障を排し何卒御參列
被成下度此段御案内申上候恐々

當 日 式 次
第一、着 席 第二、宗 歌 第三、觀劇奉誦
第四、告白文 第五、奉祝文 第六、唱 題

第七、宗 歌 第八、退 席

演 說
開會の辭
心靈の復活と聖國の擴張
衛生心理學上より見たる日蓮上人
早く日蓮上人の慈教にすぶれ

一、薩摩琵琶 一、講 談 一、琴 一、會員數香
明治四十年四月六日

芝區二本榎町一丁目十八番地
日宗中央青年會本部

教學財團基金寄附申込表(第六回)

金壹百圓 東京淺草妙經寺住職 里見 日漸
金壹百圓 全 壽仙院住職 川崎 泰秀
金壹百廿圓 東京府豊多摩郡堀之内村 川崎文四郎
金壹圓 全 盛岡市法華寺檀家 檀 家 中
金壹圓五十錢 蕪井縣南居妙正寺檀家 藤田 佐一
金五拾圓 東京品川妙圓寺檀家 飛山 平作
金五拾圓 全 淺草妙經寺檀家 平野萬之助
金拾圓 全 淺草妙經寺檀家 樋口八五郎
金貳拾圓 全 全 鈴木 佐七
金貳拾圓 全 全 兒玉 潔

金拾五圓 山形縣砂塚運藏寺住職 平賀 龍惠
金壹百圓 栃木縣柏崎妙顯寺檀家 見目 清
金壹拾圓 全 妙顯寺 檀 家 中
金壹百圓 千葉縣山武郡南郷村 平山由次郎
金六拾圓 全縣東金妙福寺兼淨圓坊住職 錦織日航
金五圓 全縣森 本 圓 寺
金四圓 全縣武勝本隆寺兼務 萩原 宗監
金拾貳圓五拾錢 全縣雨坪 東 源 寺
金拾圓 全縣山武郡片見村田中 大塚與左衛門
金五圓 廣島縣廣島妙詠寺檀家 佐々木佐市
金四圓 全縣井原高源寺檀家 岡崎幸三郎
金六圓 金澤市六斗林本覺寺住職 石塚 日孝
金壹百圓 東京市赤坂常玄寺住職 松木 日新
金參圓 千葉縣濱野堯圓坊内 山本 信讓
金貳拾圓 東京下谷妙顯寺檀家 須田 友吉
金參圓 岡山縣和氣本成寺檀家 保江 柳二
金五圓 東京小石川本念寺檀家 増山 庄吉
金拾圓 堺市市之町東二丁 前田 雄成
金五圓 千葉縣東金仲性寺住職 藤本 乾道
金六圓 全 松ノ郷壽福寺住職 全 人
金貳拾圓 金澤市沼田町安立寺住職 成島 隆康
金拾圓 金澤市沼田町安立寺 檀 家 中
金拾圓 全 妙法寺 檀 家 中
金百廿五圓 姫路市妙立寺檀家 金貳拾圓 三宅 榮次

金貳拾圓 三宅 知治
金拾五圓 八杉 利平
金拾圓 三宅 茂吉
全 井上 清吉
金七圓 熊澤 春龍
金壹圓 井上 ハナ
全 市妙善寺檀家 全
金五拾圓 兼田 卯吉
金參拾圓 高島 卯平
金拾圓 西村 清吉
金拾圓 射場安太郎
金五圓 岩田 辰次
鳥取縣松崎本立寺檀家
金壹百圓 市橋 彦藏
金八拾圓 市橋 梅吉
金拾五圓 立木 つた
金五圓 野口 豊藏
千葉縣宮蓮成寺檀家
金五拾圓 小川 亮
金拾圓 土屋源三郎
金拾五圓 古川 茂
廣島縣廣島市本照寺檀家(第一回)
金貳拾六圓 玉田 甚藏
金貳拾五圓 丸山惣三郎
金拾五圓 野田 ちせ
金貳拾圓 三宅 竹太郎
金拾圓 三宅 龍益
金拾圓 大塚 トセ
金壹圓 黒田寅次郎
全 桔梗 信次
全 井上 セキ
全 黒田 來助
全 山中 政吉
全 下村 米吉
全 山口市之助
全 市橋 馬藏
全 市橋 千藏
全 杉村五百造
全 安川 保
全 子安岩太郎
全 長門民次郎
全 中島常太郎
全 竹内 マサ

| | | | | | |
|------|---|------------|-----|-----|-----|
| 金拾圓 | 全 | 添田 | 協 | 芳廣 | 勇平 |
| 金拾圓 | 全 | 石井 | とら | 廣田 | 仙吉 |
| 金拾圓 | 全 | 山本 | 助一 | 福山 | フヂ |
| 金壹圓 | 圓 | 岡山縣津山弘通所信徒 | 全 | 神崎 | 為治 |
| 金貳圓 | 圓 | 圓 | 神崎 | 渡邊 | 清 |
| 金貳圓 | 圓 | 牛田 | 成教 | 岡本 | 方恒 |
| 全 | 全 | 岸 | 一信 | 中村 | 欣一郎 |
| 全 | 全 | 井上 | 知彦 | 中村 | 外三 |
| 全 | 全 | 中野 | 直行 | 松村 | 義方 |
| 全 | 全 | 三好 | 壽德 | 林 | 喜太郎 |
| 全 | 全 | 恒川 | 定吉 | 島川 | 虎三郎 |
| 全 | 全 | 吉川 | 岡本 | 長谷川 | 為盛 |
| 全 | 全 | 岡本 | 鉦太郎 | 正田 | 多美 |
| 金壹圓 | 圓 | 奧村 | 惇 | 中村 | 直義 |
| 全 | 圓 | 雪野 | 慎四郎 | 石井 | 日證 |
| 金五拾錢 | 圓 | 林 | 多美 | 石井 | 日證 |

| | | | | |
|-----|-----|------------|--------------|----|
| 金貳圓 | 全 | 全清名幸谷妙本寺兼務 | 小川 | 日豐 |
| 金五圓 | 全 | 全 | 東光寺住職 | 草切 |
| 金壹圓 | 全 | 全 | 小野妙榮寺兼務 | 石渡 |
| 金四圓 | 全 | 全 | 東國吉妙照寺住職 | 英哉 |
| 金拾圓 | 全 | 全 | 吉井光明寺住職 | 米倉 |
| 金四圓 | 全 | 全 | 大木戶善德寺住職 | 智明 |
| 金四圓 | 全 | 全 | 池田法秀寺住職 | 義哲 |
| 金壹圓 | 十ノ一 | 全 | 堀上正覺寺住職 | 北田 |
| 全 | 全 | 全 | 川塲 | 東福 |
| 全 | 全 | 全 | 松之郷壽福寺住職 | 藤本 |
| 全 | 全 | 全 | 田間仲性寺兼務 | 乾道 |
| 全 | 全 | 全 | 全東金妙福寺兼淨圓坊住職 | 錦織 |
| 全 | 全 | 全 | 北ノ幸谷妙德寺住職 | 白井 |
| 全 | 全 | 全 | 津邊東漸寺住職 | 大塚 |
| 全 | 全 | 全 | 金谷常泉寺住職 | 川崎 |
| 全 | 全 | 全 | 全 | 東榮 |
| 全 | 全 | 全 | 全倉吉藏寺住職 | 吉田 |
| 全 | 全 | 全 | 木原藏光寺住職 | 萩原 |
| 全 | 全 | 全 | 武勝本隆寺兼務 | 日暮 |
| 全 | 全 | 全 | 中野本城寺住職 | 全 |
| 全 | 全 | 全 | 森 | 全 |
| 全 | 全 | 全 | 下布田光明寺住職 | 加藤 |
| 全 | 全 | 全 | 東吉田最成寺住職 | 梅澤 |
| 全 | 全 | 全 | 全三ヶ尻 | 東漸 |
| 全 | 全 | 全 | 山梨松源寺 | 檀家 |

| | | | |
|--------|-----|------------|-----------|
| 金參圓 | 全 | 福井縣今庄善勝寺檀家 | 京藤源次郎 |
| 金壹圓 | 全 | 全 | 加藤 |
| 金五拾錢 | 全 | 岡山市旭町 | 長岡 |
| 金貳拾圓 | 五ノ一 | 京都市寂光寺住職 | 田上 |
| 金拾圓 | 全 | 全 | 坪永 |
| 金四圓 | 全 | 全 | 鈴木 |
| 金四圓 | 全 | 全 | 銀井 |
| 金貳圓 | 全 | 全 | 川崎 |
| 金貳圓 | 全 | 全 | 森 |
| 金拾貳圓 | 全 | 兵庫縣西神吉村妙信寺 | 檀家 |
| 金四拾圓 | 全 | 千葉縣田中法光寺住職 | 日比野 |
| 金貳圓 | 全 | 全 | 折戸淨昭寺住職 |
| 金貳圓 | 全 | 全 | 大綱大詮寺住職 |
| 金貳圓 | 全 | 全 | 蛇島本龍寺住職 |
| 金四圓 | 全 | 全 | 油井興善寺住職 |
| 金參圓 | 全 | 全 | 大豆谷長福寺住職 |
| 金五圓 | 全 | 全 | 金澤市沼田町安立寺 |
| 金壹圓貳拾錢 | 全 | 全 | 全寺住職 |
| 金壹圓 | 全 | 岡山縣上道郡津田村 | 成島 |
| 金貳拾圓 | 全 | 千葉縣東金本漸寺住職 | 森川 |
| 金貳圓 | 全 | 全 | 正教坊住職 |
| 金四圓 | 全 | 全 | 嶺根寺住職 |
| 金壹圓六拾錢 | 全 | 全 | 立藏坊住職 |
| 金拾圓 | 全 | 全 | 皆納 |
| 金拾圓 | 全 | 全 | 堺市之町東二丁 |

| | | | | |
|-----------|-------|-------|-------|-------|
| 金五拾錢宛六十ノ一 | 柳下長次郎 | 二十ノ一 | 山田 | 房吉 |
| 金參拾錢宛六十ノ二 | 小林清次郎 | 鈴木伊之助 | 瀧川桂 | 之助 |
| 金貳拾五錢 | 廿ノ一 | 並木寅藏 | 全 | |
| 金拾七錢宛 | 六十ノ一 | 永井新藏 | 渡邊銀次郎 | 六十 |
| ノ二 | 永井新藏 | 平山龜藏 | 鈴木梅吉 | 長阪五三郎 |
| 金八錢五厘宛 | 六十ノ二 | 安富德太郎 | 田中勝三 | 六 |
| ノ一 | 山本宗明 | 全 | 全 | |
| 金貳拾圓 | 五ノ一 | 佐伯磯次郎 | 金四圓 | 全 |
| 金貳圓宛 | 全 | 玉田マサ | 蒲田岩次 | 井上清吉 |
| 金壹圓宛 | 全 | 杉山さん | 樹田久吉 | 三宅三藏 |
| 桔梗信次 | 全 | 井上セキ | 井上ハナ | 全 |
| 金參圓 | 五ノ一 | 武田久吉 | 池田勝造 | 神 |
| 金貳圓宛 | 全 | 多羅尾務 | 上田一郎治 | 河村政次郎 |
| 金壹圓宛 | 全 | 上田ヨシ | 玉置圓次郎 | 全 |
| 藤田なみ | 全 | 藤田定一 | 神崎ツギ | 大杉りく |
| 金貳拾錢宛 | 全 | 神崎龜四郎 | 全 | |
| 金壹圓 | 二ノ一 | 吉川定吉 | 恒川壽德 | 全 |

金五拾錢宛 二ノ一 疋田多美 四ノ一 岡本鉦太郎
 金四拾錢宛 五ノ一 牛田キン 井上一信 中野知秀
 林喜太郎
 金貳拾五錢 四ノ一 奥村 惇
 金拾錢宛 廿ノ一 渡邊清 岸成教 岡本方恒 中村
 欣一郎 中村外三 三好直行 松村義方 嶋村虎三
 郎 長谷川爲盛 五ノ一 中村直茂 林多美 十ノ
 一 雪野慎四郎
 東京雜司ヶ谷本染寺檀家
 金五拾錢宛 六十ノ三 柳下長次郎 廿ノ二 下井乙
 次郎 高木勝太郎 永井八重壽 十ノ一 佐野千代
 吉 濱野宇吉
 金參拾錢宛 六十ノ三 小林清次郎 瀧川桂之助 鈴
 木伊之助
 金貳拾五錢宛 廿ノ一 須田宗一 宇田川常吉 廿ノ
 二 檜山定吉 岡本光之助 戶張幸兵衛 森川松藏
 山本淺次郎 大音敏子
 金拾七錢宛 六十ノ二 桑島官次 六十ノ三 長阪吾
 三郎 桑島官次 平山龜吉 鈴木梅吉 渡邊銀次郎
 卅ノ二 山本宗明
 金八錢五厘 六十ノ三 安齋德太郎 六十ノ二 田中
 勝三
 東京駒込顯本寺檀家
 金六圓 五ノ一 小泉藤三郎 金貳圓 全 幸田彦三郎
 金貳圓 全 小山 長吉

千葉縣押堀立善寺檀家
 金壹圓宛 五ノ一 内山眞之吉 押田定次郎 神馬清助
 鈴木由太郎 鈴木清司 中田茂助
 岡山縣和氣本成寺檀家
 金貳拾圓 五ノ一 本成寺 金拾圓 全 秋山 泰二
 金八圓 全 坪井庄吉 金六圓 全 恒次德次郎
 金五圓宛 全 宇高榮次郎 内田勸吉
 金四圓宛 全 原田容廣 岸本岸次郎 周藤俊德 方
 山藤吉 藤本達次郎
 金參圓宛 全 宇高國太郎 宇高慎吉 蜂谷喜代松
 金貳圓宛 全 中島鹿三郎 萬波六郎次 黒田嘉太郎
 坪井喜介 細川吾平 松本柳造 村上重兵衛
 金壹圓八拾錢宛 全 久崎勸造 安藤勝次
 金壹圓六拾錢 全 浦上萬吉
 金壹圓五拾錢宛 全 恒次壽 浦上藍吉 浦上小太郎
 金壹圓四拾錢宛 全 小玉兼三郎 高橋半兵衛 日笠
 猪平 近藤石造
 金壹圓貳拾錢宛 全 坪井彌市 小玉與八郎 内田庄
 吉 恒次利平
 金壹圓宛 全 宇高佐之吉 森駿三 長田八十次郎
 金谷竹吉 新田達次郎 小林龜次郎 石野吉次郎
 新田伊三郎 我澤和平次 秋山東三九 三村菊太郎
 竹内卯吉 蜂谷淺次郎 蜂谷彌平治 竹内利喜藏
 金九拾錢 全 小吉松
 金八拾錢宛 全 延原彌三吉 杉本菊太郎 野田岩吉

伊藤竹太郎 松本林造 日笠岡五郎 浦上彌三太
 金六拾錢宛 全 從野縫治 赤堀節造 延原壽美太
 小山實三郎 土井實三 保江柳治
 金五拾錢宛 全 宇高鹿七 末森彦次郎
 金四拾錢宛 全 山本彌平 安部美喜太郎 宇田賀幾
 太郎 尾上武吉 青井壽太郎 西脇新太郎 田中八
 百吉 萬代音五郎 小林松太郎 大野音五郎 的場
 雅次 浦上伊三郎 末森次吉 浦上嘉四郎
 金參拾錢宛 全 末森庄次郎 高西富五郎 蜂谷俊郎
 金貳拾錢宛 全 大森忠太郎 宇高吉太 大森壽太郎
 阿部小松 河和秀造 岡崎銀三郎 細井つる 奥山
 民吉 神崎佐之吉 柴山久吉 吉岡澤治 神原虎次
 郎 市原とく 石野イト
 金拾錢宛 全 萬波藤吉 青井ヤノ 唐桶市太郎 岡
 部小三郎 岡部清次郎 安藤新造 小山末松 黒田
 良吉 三村虎吉
 岡山縣津山本蓮寺檀家
 金壹圓 五ノ一 谷口榮造
 金貳拾錢宛 五十ノ五 宮崎賢次郎 妹尾爲吉 服部
 金五郎 安藤幸成 安藤成續
 全 縣吉ヶ原本經寺檀家
 金貳圓宛 五ノ一 星賀照次郎 根岸増次郎 西村淺
 四郎 根岸長次郎 福田恒次郎
 金六圓貳拾錢 全 柴原光二郎 外吉ヶ原檀家一同
 金四圓四拾八錢 全 中村瀧五郎 外廿七名

金四圓拾錢四厘 全 妹尾順次外十七名
 金壹圓四拾五錢六厘 全 中村孝太郎外十三名
 金參圓貳拾四錢 全 和田啓二外十三名
 金貳圓拾六錢 全 安蘇村檀家中
 金壹圓九拾四錢四厘 全 中島留二外八名
 金壹圓八錢 全 休石檀家中
 金六拾四錢八厘宛 全 日笠友二外三名 村上彦市外
 二名 周佐村檀家中
 金參拾七錢貳厘 全 田井村檀家中
 金貳圓貳拾貳錢 全 本經寺檀家有志一同
 姫路市五軒邸妙立寺檀家
 金貳拾五圓 五ノ一 三宅庄次郎 金參圓 全 八杉利平
 金貳圓 全 熊澤春龍 金壹圓 竹中ヲイ
 全 妙善寺檀家
 金拾圓 五ノ一 兼田卯吉 金四圓 全 山中政吉
 金六圓宛 全 黒田來助 高島卯平
 金貳圓宛 全 西村清吉 的場安太郎 下村米吉
 金壹圓宛 全 岩田辰次 山口市之助
 岡山縣津山弘通所信徒
 金貳圓 四十八ノ三、四 林日法
 金貳拾錢宛 五ノ一 神崎虎藏 神崎爲治
 前號報告訂正
 愛知縣豐橋市妙圓寺檀家「金四拾錢五厘平山孝八」ハ
 「金貳圓 皆納 平山孝八」ノ誤
 六錢 五ノ一 太田市造」ノ誤
 全 寺報告中「金貳拾錢宛」ノ下「島田榮作」ノ四字ヲ脱ス

木佛具 木像 大販賣

(印目堂法三)



小包條例附三法堂諸佛發賣目錄 (正價付)

佛書佛具佛像位牌木魚其種類品有之候を以て
 注意 佛書佛具佛像位牌木魚其種類品有之候を以て
 目録書を作製致置候に付御入用の諸君は郵券四錢御送
 付被下候は迅速進呈仕候此の目録御用ひなれば寺
 院様方の御入用品一切の買物何程遠方でも座ながら安
 價にて買はれ升其の正札附の品は左の通り
 佛書一冊 佛具一切 過去帳の類 大般若經 一切藏經 理趣分 位牌 太
 鼓 佛具金物一切 釣鐘 牛鐘 木魚 拂子 曲鉢 香 珠數 大傘
 類 屬子 中尊等 洞 鈎 金剛經 水引打數 和經 唐經 人天蓋 燈籠
 類 三寶菩提心 木像厨子 木像厨子 木像厨子 木像厨子 木像厨子 木像厨子
 水板 佛物等 高皿 袈裟衣 袈裟衣 袈裟衣 袈裟衣 袈裟衣 袈裟衣
 て御買物なら自由在 振替貯金口座第一〇七一番

各宗御用 木山 京都小橋三條 三法堂 藤田總治
 御表具師 全町小橋 三法堂 藤田總治
 大佛師 東入下橋 三法堂 陳列所

佛書表具の元祖
 各宗御寺院御入
 用品一切何にて
 も多少に限不御
 注文仰付らるべ
 し佛書は申すに
 不及御肖像書專
 門
 木魚位牌卸小賣

日蓮上人御眞筆 御曼題目一幅
 日門上人極幅及日檀上人裏極附 極美表裝也
日常上人御眞筆 御曼題目一幅
 身延六十七代日檀上人裏極附也 極美表裝也
右二品篤志の方に譲渡渡し
開帳衆人に拜 せしめん爲めに借受け度望
 其の向には別に御相談可致候

東京芝區西久保八幡町十八
六癡社 第一部

腦脊髓 精神病 帝國腦病院
 東京市神田區和泉町
 (電話 下谷七一七番)
 院長ドクトル齋藤紀一明治卅三年専門學研究の爲め獨
 逸へ留學卅六年同大學卒業尙進て英佛専門病院を視察
 兩院にて診察す

精神病 專門 青山病院
 東京市青山南町
 (電話新橋三六四五番)

顯本法華宗務廳發行

顯本法華宗制及雜則

職員録寺院教師一覽表

既刊

一部拾五錢 郵稅貳錢

右ハ顯本法華宗現行諸則及寺院教師等詳細ニ記載シア
 ルヲ以テ全宗ノ大勢ヲ知ラント欲スル人ハ一本ヲ購フ
 テ座右ニ備ヘラルベシ本書ハ元ト本宗内各寺院ニ限リ
 配布セラレタルモノナルモ宗門ノ内容研究ノ志アル人
 ノ爲メニ特ニ乞フテ發賣ノ許可ヲ得タルモノナルヲ以
 テ部數限リアリ需用者ハ至急申込ルベシ

東京淺草南松山町四十五番地
發賣所 統一團
 (振替口座一三一九番)

一本誌は毎月一回十五日を以て發行期日とす
 一本誌は一冊六錢十二冊前金六十五錢、郵券代用は一割増但五厘切手
 を可とす
 一請讀申込の節は住所姓名を附書にて認めらるべし
 一本誌代金拂込は振替貯金に依り、亦最も便利とす、拂込用紙は最
 寄郵便局に請求し受取らるべし

| | | | |
|----|----|-------|----------------|
| 一頁 | 半頁 | 四分ノ一頁 | 特別廣告 |
| 拾圓 | 六圓 | 三圓五拾錢 | 十五圓ヨリ 廿五圓マテ |

明治四十年四月十五日印刷發行

發行所 統一團

東京淺草區南松山町四十五番地

發行人 井村 恂也
 編輯人 山根 顯道
 印刷人 鈴木 暲學
 印刷所 北澤活版所

文學博士
大塚

八郎君序
生師著 (既製發賣)

法華經講義

和裝鉄入全八冊 正價金四圓 郵税金三十錢
洋裝背皮全二冊 臺清韓二十錢

法華は天地法界の秘藏、世界群籍の帝王、亞細亞文明の中樞、佛教教觀の實蹟にして、佛陀觀、宇宙觀、人身觀、教法觀、行法觀、その他教相教義の全般に亘りて之を調整し發揮せるもの、苟も佛教の眞意を知らんと欲せば必ず法華經に來るべき也
古今東西の法華經觀を網羅し、特に天台と日蓮との創見を發揮して更に新考案の下に佛教の積極的統一主義を闡明したる本書は實に佛教研究の上に現代及未來の光明たらん矣

發行所 東京市淺草區南松山町 **統一團**
大賣捌所 東京市京橋區傳南馬町 **須原屋**

小泉要智監修

求道の栞

最良の施本

(本書の内容) 信仰倫理の二大篇よりなり信仰篇を覺醒發心救濟信仰安住の五章に倫理篇を戒法倫常慈愛報恩公益の五章に分ち宗祖の金言を以て之を説く標註を加へ傍訓を付し通俗を旨とし一讀宗教の眞髓に達し本化の妙道に悟入せしむ
(本書の特色) 摘録の聖判は實際的信仰の粹を蒐め求道者の心琴に觸れて直ちに微妙の響を發せしむ亦是一部の日蓮聖人妙文集なり信ずる者は信根に培ひ未入の者には誘導の指針たり朝暮身に帯びて靈光に浴し人に與へて法悦を頌つべき也
米人ヅキ一題 小泉 要智著

聖日蓮之文學觀

定價五十錢 送料六錢

法華經大觀

定價五十錢 送料六錢

本多日生師講述
國友文次郎筆受

發行所 東京市京橋區南傳馬三ノ五 **須原屋書店**
振替口座四九六〇番
賣捌 東京統一團 岡山市下之入江勝一郎
町平井屋

統一

第四百七十七號

佛教の統一的信仰 本多日生
本尊に關する重要教義 (承前) 本多日生
日蓮主義の發展 秋葉 顯正
宗門經營の理想(續) 井村 恂也
龍圖章講義(第廿九回) 阪本日桓
十法界妙講義(第四回) 阪本日桓
渡米餘稿(一) 在米國 南山 樵夫
雷の鳴りしとき 田中きく子
雜報 教學財團覽報